Two Strange InterestS 2nd -Lovey Dovey-

霧原菜穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｔｗｏ　Ｓｔｒａｎｇｅ　ＩｎｔｅｒｅｓｔＳ　２ｎｄ　―Ｌｏｖｅｙ　Ｄｏｖｅｙ―

【Ｎコード】

Ｎ１４１６Ｕ

【作者名】

霧原菜穂

【あらすじ】

ギャルゲーを愛する彼女とＢＬに逃避する彼が出会ったとき、現代日本でしかありえない、世にも不可思議な利害関係が構築された後の物語、要するに続編です。新しいお姉さまキャラに都は歓喜、薫は浮気！？

A rainbow and your voice to be remo

この物語は、「Two Strange InterestS」の続編です。
前作を知らない方は、軽く目を通していただけるといいと思います！
http://ncode.syosetu.com/n9181a/

A rainbow and your voice to be remo

「あたし」が彼と出会ったのは、彼がバイト先に新人として入ってきたことがキッカケだった。

近くの大学に入学した新入生が、新人バイトとして大量参戦する4月。学生バイトを多く受け入れているこのファミレスも例外ではなく、彼もその中の一人で、あたしにしてみれば可愛い後輩。

とりあえず第一印象……都会に出てモデルにでもなればいいのに。それくらい整った外見は他の追随を許さない。同期で入ってきた他のバイトとも、今まで働いていた先輩バイトと比べても、誰も彼に勝てるわけがなかった。当然女の子は彼に言い寄り、男の子は彼に嫉妬する……そんなバトルが繰り広げられることを、誰もが予想したのに。

結果は、そうじゃなかった。

彼に告白した女の子は全員玉砕し、色目を使っても当然のようにスルーされる結果が続いてくじける脱落者ばかり。

仕事が出来てお人よしの性格は、同性から好かれ、そしていじられた。

結果としてドロドロとした人間ドラマは展開されず、彼を中心に新たな店の人間関係が構築される結果に、店長やあたし達フリーターで構成された「状況を傍観する会」の面子は拍子抜けしてしまったのである。

勿論、その会の副委員長だったあたしも、やたら綺麗にまとまってしまった現実につまらなさを感じ、同時にそんな結果にしてしまった本人を凄いと思ったりしたのだ。

ただ……彼には何か、女性に近づかない理由がある。それは何となく察していた。ただ、そこまで興味本位で突っ込めるほどデリカシーが欠如しているわけでもない。人は誰しも知られたくないことがある。それはあたしも同じなので、結局彼は全員と絶妙な距離を

保ちながら、笑顔で業務をこなしていったのである。

だから正直、彼に……新谷薫に彼女が出来た。その話を聞いたときは驚いた。

同時に、彼を落とした彼女にも興味がわいた。バイト先の女の子達の話を総称すれば、同じ大学の、顔は並程度、友人関係も広くなく、特に目立った要素のない人物らしい。

ただ、女の話は当てにならない。彼女達は自分に都合のいいように現実を歪曲する。彼女達の「並」がどこまで「並」なのか甚だ疑問だし、あたしは自分の目で確かめないと気がすまないタイプだ。あの難攻不落の王子様をゲットしたお姫様の姿を、一度、拝んでみようじゃないのさっ！！

と、いうわけで。

「……千佳、大学に来る動機が不純すぎるわよ」

普段は立ち入らない大学構内、諸事情でルームシェアしている友人の真雪が彼と同じ大学であるというツテを使い、普段着で彼女の横を堂々と歩きながら、エセ大学生として構内調査実行中なのである。

１７０センチのあたしより身長が頭一つ小さい、本日は頭にニットの帽子、白いワンピースの上から丈の短いジーンズ素材のジャケットを羽織っている真雪は、ふわふわとゆれる長い髪の毛をなびかせながら、あたしを苦笑とも呆れとも取れるような表情で見上げ、

「新谷君、だっけ。私、彼の顔もだけど、彼が今日どんな授業を履修してるのか、何も知らないわよ？」

「その辺は任せてよ。ちゃんと事前調査してきてるからさっ♪」

「……そういうことに関しては完璧なんだから……」

教科書一式の入ったトートバックを持ち直し、深々とため息をつく真雪。折角の綺麗な顔が台無しである。まぁ、あたしのせいだけど。

ちなみに本日、これから始まる午後1発目の授業は、彼と噂の彼女が一緒に履修している唯一の科目らしい。二人とも付き合いがあるので、毎回隣に座っているわけでもないらしいのだが……最近は隣席率が高くなり、周囲があまりのラブラブぶりに呆れているとかいないとか。（By：バイト先のA子さん）

「私、その授業なら2年前に取ったんだけど……」

現在3年生の真雪がぶつぶつと呟いているが、「今度お店に来てくれたら好きなもの食べていいから★」というおなじみの買収で何とか付き合ってくれる。真雪はあまり他の人間関係に干渉したがらない、噂を嫌う性分であることはあたしが誰よりも理解しているけど……でも、それでも、気になるものは気になるのだ。

真雪だって、そんなあたしの性格は誰よりも承知しているはず。結局はあたしに付き合い、そして、

「で、彼にばれないようにしたいんでしょう？　だったら早めに後ろの席を取りましょう。あの授業は人数も多いし教室も広いから……全体を見渡せる座席を確保出来なきゃ意味がないものね」

しっかり、協力してくれるのだ。

話の分かる親友に感謝しながら、あたしは授業が行われる教室へと、足を踏み入れる。

その授業が行われるという教室は、大学の中でも広い方に分類されるらしい。扉を開いた瞬間、階段状に上まで続く座席を見上げ、「おぉ、大学っぽい」という普通の感想を呟いてしまった。

教壇は一番低い場所にある。１０分前だというのに人気のまばらな教室内を移動し、あたし達は教室向かって左端、通路側の上から３番目、教室全体を見渡せるポジションに陣取る。

真雪曰く、「みんな入ってくるのは5分前」らしい。あたしは視力1．5の両目をサーチライトのように光らせながら、2箇所ある入り口、入ってくる人間をじぃっと見つめていた。

友達と話しながら入ってくる人、一人で音楽を聴きながら入って

くる人、いろんな生徒が――いろんな人が、いる。
「……あたしも、通ってみたかったな、大学」
同年代の子たちが楽しそうに歩いているキャンパス。それを遠くから眺めるだけにしているのは……自分がその中に入れないことを、誰よりも理解しているから。
ぽつりと呟いた言葉に、横に座った真雪が苦笑いを向ける。
「高校時代は学校嫌いだったくせに」
確かにその通りでございます。
「千佳は入学しても続かないわよ。こうしてもぐりこむ程度が丁度いいんじゃないの？」
「……かもね」
相変わらず的確な指摘に降参。結局あたしは彼女に敵わないのだ。いや、勝てるはずがない。あたしをココまで受け入れてくれた彼女と自分を比べるなんて、それこそ――
「……を？」
色々思いかけた瞬間、入り口で一際目立つ存在を発見。
見間違えるはずない。彼だ、本日の獲物がやってきたっ！！
「ホラ真雪、彼だよ、あそこにいる無駄なほど爽やか君っ！」
「……失礼よ、千佳」
冷静に突っ込んだ真雪もまた、あたしの指の先を見つめ、「なるほど。確かに無駄なほど爽やか君かもね」と、先ほど否定した言葉を思いっきり肯定した。
本日の彼は、黒いシャツの上から同系色のジャケットを羽織り、下は濃紺のジーンズ。眼鏡をかけた双方で室内をきょろきょろと見渡し、誰かを探しているみたいだが……見つけられなかったのか、そのままコチラへ向かって歩き始める。
げげっ！　ココで見つかったらあたしの完璧な傍観計画に不都合が生じてしまうじゃないかっ！！
「やばっ！　新谷君、こっちに来る！？」
想定外の事態に取り乱すあたしに、真雪は無言で自分が被ってい

たニット帽を半強制的にかぶせ、そのまま机の上に頭ごと押し付けた。
　机と額がガードする間もなく正面衝突する。彼女はそのままあたしの頭を押さえつけ、涼しい顔で彼の行動を伺っているのだが……あの、真雪……助かったけど痛いんですけど……。
「……真雪、痛い」
「見つかっても良かったっていうの？」
　確かにその通りでございます。
　帽子という変装グッズの基本を忘れた自分を叱咤しながら、彼女が手を離してくれる時まで、じっと突っ伏して耐えるしかないあたし。
「もう大丈夫ね。千佳、お疲れ様」
　まだ何も始まっていないのだが、どっと疲れが。彼女があたしの頭から手を離した瞬間、突っ伏したままで笑顔の真雪を見上げ、
「……乙女の柔肌に傷が残ったらどうしてくれるのさ」
「寝言は寝てから言うべきだと思うわよ？」
　容赦ない切り替えしに、閉口するしかない。
　あたしはそろ～っと上体を起こし、真雪が指差すほうへ視線を移した。
　ターゲットである新谷君は、あたし達から見れば座席3席分ほど斜め前に着席。地味に近いけどよく観察できる場所に陣取ってくれたことに感謝しながら、彼女の到着を待つ。
「今日は別々に座る日だったりして」
「……そういうこと言わないでください」
　不吉なことを笑顔で呟く真雪に突っ込みながら、あたしは、彼の背中を見つめていた。
　背中しか見えないけど、その存在感は他と違う。優しいけど、安易に近寄りがたい、そんな感じがする。
　彼はいつもそうだ。他人を引き寄せる魅力と、簡単に踏み込めない雰囲気。その二つを併せ持っている、難しい存在。

彼を遠巻きに見ている女子生徒の数は多い。だけど、誰も彼に話しかけようとしない。もしかしたら以前に玉砕したのかもしれない。
新谷君が女性を遠ざける理由は何だろう。そんなことあたしには分からない。ただ……。
「……あ」
不意に、真雪が声をもらす。何事かと思って彼女の視線を追うと、
「……ビンゴ」
あたしは思わず笑みを浮かべていた。気がつけば、彼の隣に女性が座っている。顔を見損ねたので判断しかねるが、首の後ろにかかるくらいの髪の毛にキャラメル色のパーカーを着て、何よりも彼と自然に話している様子から、単なる友人ではないことを察することが出来る。
「真雪、顔は見た？」
「見てないの？」
あれだけ待っていたくせに見ていないのか。思いっきりジト目を向けられ、反論できない。
「……スイマセン、タイミング逃しました」
素直に白状すると、思いっきりため息をつかれた。
「まぁ、顔は明るい感じで可愛いと思うわよ？　遠めに見てもスタイルいいみたいだし。彼との共通点は眼鏡かしら」
たった数秒でどれだけ観察していたのだろうか。さらりと彼女の特徴を述べる真雪に、改めて侮れない力を感じる。
新谷君の隣に座っている彼女は、当たり前に彼と会話していた。彼も、今まであたしが見たことないほど優しい雰囲気で盛り上がっている。会話の内容まではさすがに聞こえてこないけど……でも、
「あの新谷君がねぇ……」
正直、意外だった。彼に彼女がいるという話も、こうやって現実を見せられるまでは半信半疑だったのだから。
でも……彼は今、楽しそうだ。バイト中には絶対見せない、きっと、彼女の前でしか見せない素顔になっているのだろう。

初めて見たときから思っていたことを、心の中で再確認する。
彼とあたしは似ている、境遇はまるで違うだろうけど、でも、似ている。
あたしに真雪がいるように、彼には彼女がいて、それで――
「……ねぇ、真雪」
「何？」
「あたしは、あんたに救われた。真雪がいなかったら……あたしは多分、この場所にいられなかったと思う」
ぽつりと呟いた言葉の意味を、真雪は誰よりも理解しているはず。
だからこれ以上は語らず、あたしはもう一度、楽しそうに話している二人の背中を見つめ、
「あたしにとっての真雪が、新谷君にとっての彼女であればいいなって……思ってるんだよね」
「……そういうことね」
納得したような口調の真雪もまた、二人の姿を見つめ、
「私は彼のこと、何も知らないけど……でも、あんなに笑ってるんだもの。二人の間に利害関係なんかはないように見えるけど」
彼女がそう呟いた瞬間、始業を知らせるチャイムが鳴り響く。
これ以上この場所にとどまる理由もないので、あたしは荷物を持って静かに立ち上がろうと――
「――あら、ダメよ千佳ったら」
刹那、隣に座っている真雪に思いっきり服の袖を引っ張られ、再び着席。
扉から教師らしき男性が入ってきた。ヲイ、このままじゃあたしまで授業受けなくちゃならなくなるだろ！？
「お、おい真雪……あたし、講義なんて冗談じゃな……」
「あら、たまには学問的な話も聞いておかないと、脳年齢が退化する一方よ？　私も久しぶりに聞こうと思っているし……大丈夫、千佳にも何とか分かる授業だと思うから」
さりげなく失礼なことを言い放った真雪は、自分のバックからル

ーズリーフとシャーペンを取り出すと、
「とりあえず……ノートくらい取りなさいよね？　学生として潜り込んでるんだから♪」
彼女の生真面目で意地悪な性格は、あたしが逃げることを許さず……。
結局それから９０分、久しぶりに眠気と戦いながら講義を受ける羽目になる。
正直、教壇に立っている教授が何を言いたいのか、回りくどくてあたしには理解不能。横の真雪が頷いているのがなぜなのか、本気で頭をひねってしまう。
ただ、たまにちらりと新谷君を見下ろすと……あたしと同じく眠りかけた彼女をペンでつついていたりして。
「……眠いよね、うん、その気持ち分かるよ」
「同情しないの」
横から思いっきり０．３のペンで刺されるあたしなのである。

後日、あたしは新谷君と休憩時間が微妙に重なり、スタッフが休むバックルームで鉢合わせすることになった。
ブラウスに黒のスラックス、というウェイター用の制服に身を包んだ彼が、疲れた表情でバックルームに入ってきて、フラフラとパイプ椅子に腰を下ろす。
基本、接客は女性スタッフが行い、男性は厨房が多いのだが……彼の場合はほとんどが接客。理由はまぁ、言うまでもないと思う。
「お疲れ様、相変わらず女の子にモテモテだね」
もうすぐ休憩時間が終了するあたしは、身支度を整えながらにたりと彼を見つめた。
さっき、料理を運んだテーブルで、女性客に話しかけられている様子を目撃してしまったのだ。壁際から彼を見つめるあたしの視線に、「やめてください」と苦笑を返す新谷君。
「そんなんじゃ、彼女に浮気だって言われちゃうんじゃないの？」

彼に彼女がいることは周知の事実。ただ、あたしからこの話題を彼にふることはなかった。案の定少し驚いたような表情になるが、すぐ、その眼を細めて呟く。
「浮気なんかしませんよ。そんな度胸も余裕もありませんから」
「でも、彼女が出来てからも結構な数告白されてるって聞いてるわよ？」
「……どこから聞いてるんですか、そういうこと」
ジト目で見つめられ、「まぁ、あたしも色々と情報源があるのよ」という言葉で適当に誤魔化し、
「正直、浮気しそうになったこともあるんじゃないの？」
「ないですね」
あたしの冗談交じりの言葉を、彼はきっぱりと断言した。その潔さは彼らしく、イマドキにしては珍しい。
いや、彼ならやりかねないと思っていたけど……でも、ここまではっきり言われると、ますます顔を見そこねた彼女に興味がわくんですけど。
「そんなに魅力的な子なんだ。プリクラとか写真は持ってないの？あたしにもどんな子なのか見せてよ～」
「写真……そういえば持ってないですね。今度一緒に撮りたいです。そしたら藤原さんにも見せますから」
こら、はにかんで願望を語るな。このバカップルめ。
ただ……新谷君のこんな顔、今まで見たことない。
椅子に座ってスポーツドリンクを片手に、凄く優しい表情の新谷君。彼はいつも優しいけど、こうやって誰か一人を思っている顔は、初めて見た。
要するに、それだけ、
「……新谷君のそんな顔、バイト中に初めてみたよ」
「そうですか？」
「そうよ。普段も優しそうな顔してるけど……どこかで女の子を遠ざけようとしてるでしょう？　ある程度距離をとった付き合いしか

してないなーと思ってたから、正直意外」
「よく見てますね、さすがです」
照れ笑いをする彼に、あたしは意地悪な顔で指摘した。
「……好きで好きでしょうがないって感じだね。今すぐ彼女に会いたいって顔してるよ？」
普通なら赤面して「違う」と釈明するような場面でも、彼はあっさり切り返す。
「まぁ……実際そうですね」
ヲイ、この男は……どこまで自分に正直なんだ、相手があたしとはいえ。
あまりのラブラブぶりに軽く怒りを覚え始めた頃、彼は少しうつむきながら、ぽつりと呟く。
「……彼女のおかげで、今の俺がいるんです。彼女は弱い俺を強くしてくれた、逃げることばかりを選んでいた俺に、正面からぶつかってくれた。だから俺も、彼女のことを聞かれたら誤魔化さずに答えようって決めたんです。俺が都を好きなことに、嘘はありませんから」
なるほど、彼女の名前は都ちゃんというのか……今度真雪に調べてもらえないかな。いや、バイトの子に聞けば一発で分かるかな？
ただ、その「都ちゃん」は……今の彼にとってなくてはならない存在になったのだろう。二人の間に何があったのかは分からないけど、でも、彼がこうして今、幸せならば……。
「……良かったね、新谷君」
「そうですね」
彼につられて、あたしも笑っていた。
同時に、ここまで彼を惹きつけている彼女に……「都ちゃん」に、並々ならぬ興味がわいて。
それから、あたしは本格的に彼らと接していくことにする。
それが、あたし自身を、あたしと真雪の関係まで変えてしまうよ

うな……忘れられない日々の始まりになったのだ。

A rainbow and your voice to be remo

ついに始まった第2部……発展した2人をニヤニヤしながらお楽しみください。新キャラは基本的に女性です。都大喜びですな。

大切な場所

「沢城」

最初、彼は私のことをそう呼んでいた。出会ってから数ヶ月、お互いのことをぼちぼち深く知りながらも、踏み込まない関係。それが私と彼の間に合った暗黙の了解であり、絶対に超えられない境界線だと、私は信じて疑わなかったのだ。

超えられない、超えちゃいけない。そう言い聞かせたこともある。

「都」

関係が進化して、呼び方も変わった。気がつけば私達はいつも一緒にいたし、今の私にはもう、彼のいない生活なんか考えられない。

毎日会っていても足りない。それは、利害関係が恋人という関係に変わってから……私の中で一層強くなった正直な思い。

だから、

「……いっ……！」

布団の中で一人背中を丸め、苦痛に顔をゆがめる。

朝の光が差し込む寮の個室。最近散らかり始めた室内を見ないフリしたいなーと現実逃避しながら、一度、天井を見上げた。

静かな空間。勿論部屋の中には私しかいなくて、分かっていても少し寂しくなる。

そして……痛い。意識から除外したいけど、無理。

「……朝からサイテー……」

ため息をつく。私の睡眠を阻害するほどの腹痛には心当たりがありまくるので、気力と根性で起き上がり、床に立った。

「ひぅっ……いいったぁー……」

腰を押さえ、おばーさんのように前かがみになる。だけど、この

場でじっとしているわけにもいかない。今はとにかく、あの場所を目指さなくては。
動きたくないと抵抗する体を必死に動かしながら、私は部屋から脱出して――

「……都ちゃん、少しは部屋を片付けたほうがいいと思うよ？」
案の定、部屋の外で行き倒れた私を見つけた隣室の友人・奈々が、荒れ果てた室内を見渡し、苦笑する。
大学が管理しているこの女子寮は、鉄筋コンクリート3階建ての建物に45部屋あり、全て個室。勿論食堂や浴場、洗濯機などは共用なのだが、言ってしまえば女の園？
学年ごとの割合はほぼ同率。ただ、大学生にもなると学年ごとの上下関係はほとんどなくて、むしろ女だらけなので気兼ねしなくてすむのか……皆様、たまに随分大胆である。（詳しくは言えないけど）
今のところ百合は発見できていないが、別に男子禁制というシチュエーションでもないので、男性の出入りも案外あるのが現実。ただ、薫は絶対に呼ばないことにしている。大騒ぎになる可能性がある（＝彼がいじられる）のは当然なんだけど、一番の理由は、そのー……。
「新谷君、幻滅かも？」
「……そんなこと言わないでよぉ……」
ベッドの淵に腰掛け、可愛い顔で意地悪なことを言う友人に、私は情けない声しか返せなかった。
まぁ、別に広いわけでもない、家財といえば部屋に入って正面にある勉強机（その上にノートパソコン）、向かって右側にベッド、その反対の壁側に置いた本棚とテレビ、プラスチックの洋服収納ケースくらいなのだが（クローゼットは備え付けてあるのですよ、女子寮ですからね）……いや、これだけなら散らかったりしませんから。っていうかゴミの分別から始めるべきだと思わないかい私？

床には使った教科書や使わない教科書、図書館から借りている本などが無造作に積み上げられ、不安定なタワーが乱立している。洗濯物を一時的にためている布製ラックは服が溢れる寸前だし、っていうかあのペットボトル……いつ買ってきたやつだっけ？

「あ、靴下が脱ぎっぱなしだー」

部屋の片隅を指差し、じぃっと私を見つめる奈々。

「……病人の部屋で粗探ししないで……」

「えへへ……ゴメンね。だって、面白いんだもん」

「面白くないよぉ……」

腹痛に顔をゆがめる私を、彼女は終始笑顔で観察しているのだった。

彼女――奈々は、大学に入学してから知り合った、ノーマル（に近い）系の友人だ。

二の腕付近まで伸びた髪の毛を左右で少しだけ結い、小柄だけど大きな瞳が特徴的。本日は白のブラウスに赤のネクタイ、同系色のプリーツスカートに紺色のハイソックス……という、どこぞの高校生（コスプレ？）かと思うような服装である。似合ってるけど。

綾美や林檎ちゃんとは違うタイプの美少女であり、綾美が頼りになる姉貴、林檎ちゃんが年下ロリなら……奈々は同年齢の幼馴染ってところだろう。毎朝起こしてくれそうな、起こしてほしいような雰囲気の持ち主である。

女の子らしい雰囲気の奈々だけど、性格はしっかり者の世話焼きタイプ。小奇麗にまとまっている彼女の部屋は、私が真似したいお手本でもある。しかも、彼女は手先も器用らしく、ぬいぐるみや枕カバーなどを自分で作ってしまうらしい……理想的だよ。（何が！？）

ただ、先ほど、私が彼女を「ノーマル（に近い）」という微妙な表現で紹介したのには、ちゃんとした理由がありまして。

まぁ結局、類は友を呼ぶといいますか、なんというか。

「でも、先月から特に大変そうだね。大丈夫？」

「……ピンクのバファリンが欲しい……」
「後から寮母さんにもらってきてあげるよ。朝ごはんは……無理、かな？」
動けない私を察した彼女が、「しょーがない、都ちゃんの朝ごはんは奈々のデリバリーだ！」と、苦笑しながら約束してくれた。
正直助かる。私は多分、今日一日……ろくに動けないだろうから。
「都ちゃん、今日の授業とバイトは？」
「バイトは……ない。授業は、3限のノートだけ、お願い……」
「分かりました」
頷いた奈々は、「ついでに洗濯も、私のと一緒に洗っておくね」と、溢れる寸前の汚れ物を指さしてくれる。
さすが……さすが幼馴染系世話好き！　自分の充実した人間関係に笑いがとまらない今日この頃である。
「でも……やっぱりコレって、愛されちゃってるからなの？」
私が彼女の性格に色々妄想を重ねていると、彼女がその大きな瞳で私を再び覗き込み、
「最近の都ちゃん、寮にはほとんどよりつかなくなっちゃったもんねー……一人身の奈々は寂しいっす」
「……そんなこと、ないよ」
多分。
私の言葉を「いーや、そんなことある！」と即座に完全否定した奈々は、
「都ちゃんの生理痛がこんなに重くなっちゃったのも、絶対新谷君と関係があると思うんだけど」
殊更最近、薫と付き合うようになってから……元々重かったものに拍車がかかった気がする。
薬を飲まなければ痛みにのたうちまわるしかないなんて……月に一度の拷問っす、マジで。
この寮の先輩方の意見をまとめると、一度病院に行った方がいいと言われるほどだ。

……行こうと思って時間ばかり過ぎている私はダメ人間です、ええ、ダメ人間ですとも……。
「……因果関係があるなら、私が一番知りたいわよ……」
「だよねー……じゃあ、思い当たることを順番に言って？　全部聞いてあげるから★」
ニコニコと提案する彼女に、私はため息をつきながら、
「……ココだけの話よ？」
「うんうん♪」
「薫……私が構ってあげないと、寂しくて死んじゃうの」

沈黙。

「……奈々、ゴメン。言ってみただけ」
「はいはい、ごちそーさまでした」
軽く「やっちまったぜ」感もあるのだが、赤面して顔の半分まで布団をかぶるにため息をついた彼女は、ひょいっとその場に立ち上がると、
「じゃあ、とりあえずご飯食べてくるから。都ちゃんは一人寂しく……あ、新谷君に電話してみれば？　絶対駆けつけてくれるって」
「絶対しないから！」
ダメ。今の部屋見られるわけにはいかないからっ！！
私のそんな心中を察している奈々は、可愛い笑顔で「じゃ、また後でね」と、扉を閉める。
再び一人になった私は、天井を見上げ……。
「……痛い」
腹部をえぐるような痛みに、半泣きで耐えるしかないのである。

奈々が持ってきてくれた朝食代わりのおにぎりとヨーグルト（あの、食べ合わせ悪いと思いません……？）を食べて、薬を流し込む。
彼女も今日の授業は午後かららしく、さっき、私の洗濯物を抱え

て部屋を出て行った。
そして、重い生理痛に苦しむ私は、ベッドの上で、一人、
「……ありえないから」
奈々が持ってきてくれた少女漫画を読みながら、漫画に向かって思いっきり突っ込むのである。
極度の少女漫画好きである奈々は、ことあるごとに私へ漫画を貸してくれる。それは、私も自室に漫画の類を持ち込んでいるから、同類だと思われている結果だと思うが……まぁ、私の部屋にある漫画って、ＷＪとかスクエニとか角川とか、どちらかといえば男性向けばっかりなんだけど。
対する奈々は、永遠にりぼんを購読すると宣言しているりぼんっ子。最近は少コミや花ゆめ、マーガレットにも手を伸ばしているらしいが、「私の初恋は、「○ちゃんのリボン」の大地君なのー★」と顔を真っ赤にして語ってくれたのは、出会って割と最初の頃である。
今回彼女が私の暇を潰すために持ってきてくれたのは、「神○怪盗○ャンヌ」全7巻。うん、絵は見たことあるけど、こんな話だったんだ……っていうかありえないでしょその運動能力。にしても、一人暮らしがそう簡単に出来る時代になってしまったのか……ギャルゲーじゃよくあることだけど、少女漫画の世界でも主流なのかしら一つ屋根の下（いや、今回は微妙に違うけど）。同じ名前のキャラに感情移入してしまったため、ヒロインを選んだヒーローをあまり好きになれなかったのはココだけの話。
薬が効いてきたのか、大分痛みが緩和されてきた。本を読む速度は人並みのため、ベッドの上で1時間に4冊読書完了。と、部屋に戻ってきた奈々が、ぐーたらな私を見て一言。
「……都ちゃん、新谷君呼んでもいい？」
「絶対ダメ」
即否定。ダメ。こんな部屋見られるわけにいかないですよ何があってもっ！！

本気の顔で首を横に振る私を、彼女は可愛い笑顔で「そーだよねー」と首肯し、
「じゃあ、軽くお掃除しちゃいましょー。都ちゃんは寝てていいよ、その代わり、奈々が何を捨てても怒らないでね？」
右手にゴミ袋を持ったまま、部屋にズカズカと侵入してきた。
顔面蒼白。彼女の世話好きが裏目に出ている。だって、床に積み重なっている教科書や学校のプリント、その隙間には間違いなく――！
「だ、ダメ！　ちょっ……お願いだからちょっと待ってぇっ！！」
山を崩そうとした奈々を体当たりで止めた私は、必死で笑顔を取り繕う。
「体が良くなったら、絶対掃除するから！　ほら、掃除って自分でやらないとどこに何があるのか分からないでしょう！？　奈々ありがとう！　その心遣いには心から感謝してるから……うん、確かサークル棟に用事があるって言ってなかったっけ？　ねぇ！？」
必死の形相の私に、さすがに訝しげな顔になる奈々だが……苦笑で嘆息すると、持っていたゴミ袋から手を離し、
「都ちゃん、エッチな本隠してる男の子みたいだよ？」
うぐ。実際半分大当たりなんですけど。
何とか顔を引きつらせないように、笑顔を心がけた。うぅ～……いきなり動いたから、下腹が……痛い。
引きつった表情が痛々しい私に、奈々はこれ以上何も言わず話題を変えてくれる。
「ねぇ、都ちゃんはこの漫画の中で誰が好き？」
「この中で？　うーん……やっぱり、同じ名前の彼女かな。正直、このヒーローがあまり好きになれないんだよね、今のところ」
奈々に渡された少女漫画、その表紙に登場しているヒーロー的な彼を指差すと、「あぁー分かる！　奈々もね、フィンとアクセスのカップリングが好きなの」と、目をキラキラ輝かせながらさりげなく専門用語っぽいことを口にして、

「洗濯物は、夕方にでも持ってくるから。寮母さんには話してあるから、昼ごはんとか時間がずれても大丈夫だと思う。何かあったらメールしてね？」
「ありがとう……私が男だったら、絶対奈々を嫁にしてるよ」
本音を呟く私に笑顔を返す彼女は、「お大事にね」と残して扉を閉めた。
彼女の足音が完全に遠ざかってから、
「……はー……助かった」
ベッドの上に座り込み、ため息。
教科書の山にまぎれたギャルゲー雑誌やら、机の陰に積み重ねたままの積みゲー（大樹君からの借り物を思わず持ってきてしまったものもあるけど）、その他諸々を発見されなくてよかったと心から思う。
奈々が……あの純粋娘がこんなもの見つけたら、私は世話好きの友人を一人失うことになりかねないのだから。
実際、扉近くに置いたままの鞄から半分飛び出した青い袋の中には、今日、彼に渡そうと思っていたＢＬ小説が５冊ほど。
「……連絡しとかなくちゃね」
お互い、今日はバイトがないから昼過ぎに、私の授業が終わってから会おう、なーんて約束をしていたけど……無理だろうなぁ。薬が２４時間効いてくれればいいのだけど、薬が切れるごとに猛烈な痛みと戦わなくてはならない。それだと彼に心配をかけてしまうし……何より、
「……今日は何も出来ないしなぁ」
自分で呟いて苦笑した。何を言ってるんだと思わないでほしい。好き同士ならしょうがないのっ！
会える時間が短かったり、学校でしか会えなかったりという日々が１週間ほど続いただろうか。バイトと学校だけで、互いにどうしてこんなにすれ違っているのか疑問なのだが、今日は久しぶりにゆっくり二人でいられる、そのはずだったのに。

あぁ、ゲームのヒロインが羨ましい……こんな現実問題に悩まされることなく、好きな人と好きなだけ一緒にいられるんだから。
ゲームのヒロイン……。
「……ういん〇みるのファンディスク……」
やりたかった……やれるはずだった本当なら。
完璧ヒロインに頭の中で手を振りながら、私は彼にメールを送って……急に、睡魔に襲われる。
薬のせいだろうか？　それとも、疲れているから？
何でもいいや、今日はとにかく……寝て、痛みに耐えるしかないんだから。
持っていた携帯を枕の横に起き、布団の中に潜り込む。
この部屋に彼を呼ぶことは出来ないけど、でも、側にいて欲しい、なんて……矛盾したことを考えながら。

どれくらい眠っていたのだろう。鈍い痛みに起こされた私は、ベッドの上で寝返りをうち、
「……痛い」
本日何度目なのか数えたくもない言葉を呟く。
携帯で時刻を確認すると、午後2時前だった。私が寝たのが確か10時前だから……結構寝てたんだな。
「メール……返ってきてる」
ディスプレイにメール受信の印。その新着メールは、私が寝た直後に届いていた。うわ……ゴメン、何時間前のメールなんだか。
差出人の彼に心から謝罪しながら、本分を確認して、
「……ゴメン」
もう一度謝る。そりゃーもう心から。
メール本文は一行だけだった。私から送ったのは「体調不良で今日は会えない」という旨の本文。それに対し、彼の――薫の返事は、
”今……電話しても、いい？”

……ゴメンなさい。数時間も放置プレイして本当にゴメンなさいっ！！

猛烈な罪悪感に襲われながら、私は携帯のアドレス帳から彼のナンバーを探し、

「今、電話しても大丈夫……だよね？」

返事が返ってくるはずのない問いかけ。思い出せ、確か今日、薫の授業は午前中に終わってしまうはずで、だから、私が終わるまで待ってくれるって話だったはずで……。

それから……何だっけ？

「……出られなかったら出ないよねっ！！」

３０秒悩んでたどり着いた結論に従い、私は薫に電話をかけた。

２コール、３コール……。

「都！？」

少し乱暴に電話に出た彼が、私の名前を呼ぶ。

耳元で聞こえた彼の声。それだけで、赤面してしまった。

「え、あの……薫、今、大丈夫？」

「俺は大丈夫だけど……いや、都だろ大丈夫じゃないのは。風邪でもひいた？　ノロか？　ノロなのか！？」

最近、巷で大流行のウィルス名を連呼する薫。

あのー……どうしたんですか、一体。

電話の向こうの彼がどこにいるのか分からないが、取り乱しているのは非常によく分かる。

「ど、どうしたの？　何かあった？」

「どうしたの、って……メールが返ってこないから心配してたんだよ。俺は授業で抜けられないし、電話もメールも出来ないくらい、体調が悪いのかと思って……」

「それは本当にゴメン。薬のせいで眠くて」

「風邪か？」

「……えぇまぁ、そんなとこです」
言葉を濁す私に、彼はこれ以上突っ込まず、
「じゃあ、今日は一日安静にしてるんだぞ？　でも、見舞いに行っていいなら今すぐにでも……」
「ダメっす！！」
即否定。薫でも、いや、薫だからこそこんな姿と部屋は見られちゃダメなのですよっ！！
彼が私の言葉を受け入れないなんてことはないと思っている。案の定、電話の向こうで無言になった彼が、「分かった」と、しぶしぶ呟き、
「……じゃあ、俺が都に出来ることは、ない？」
少し切ない声。胸が痛んだ。
「電話に出てくれただけで十分だよ。本当は会いたいけど……」
それが難しいことは、病人である私が一番理解している。今日と明日は、あまり動かないほうがいいと。
だけど……声を聞くんじゃなかった。心の中で少し後悔してしまった。
だって、
「……薫、あのね……」
会いたいと、思ってしまう。
声だけじゃ足りない、欲しいのは言葉じゃない、近くにいるんだから、今すぐ……会いたい。
薫に会いたいと、強く、思ってしまうから。
気がつかないうちに、私は自分の心情を吐き出していた。
「私、風邪じゃなくて生理痛なんだ。だから、そのー……今日は、あの、できないけど、でも……」
でも、
「……会いたい、から……そっち、行ってもいい？」
薫に嘘はつかない。自分の思いは、正直に、伝えたい。
膨らんだ思いに後押しされて、少し震えながら呟く私に、彼は一

瞬、無言になって、
「新作」
「へ？」
「大樹から預かってる新作があるんだ。都、やりたがってただろ？」
それが彼らしい言葉であることを、私は誰よりも理解している。
「都の具合が大丈夫なら……俺は大歓迎だよ。迎えに行こうか？」
「あ、ううん、でも……大学前のコンビニで待っててくれると、嬉しい、です……」
寮には彼を近づけないほうがいい。だけど、すぐ会いたい。
私の提案に「分かった」と頷いた彼は、
「都」
「ん？」
「今日は可愛いキャラの日？」
意地悪に問いかける薫に、口ごもる。
「そんなことない、はずなんだけど……」
空笑いで思い返せば、今日の私の言葉……普段と違いすぎる。電話という、実はあまり使ったことのないツールでコミュニケーションをとっているせいもあると思うけど。
でも、
「……俺も、会いたかったよ」
「え？」
「じゃ、待ってるからな」
彼がぼそりと呟いた言葉を問い返す間もなく、一方的に電話は切れる。
しばし、電話を見つめていた私だが……身支度を整えるため、気合を入れて立ち上がった。
正直、体の具合はよくないけど、彼と会うことを我慢するほうが体に悪い。そうに決まってる！　いま決めたっ！！
それに……新作が私を待っている！　あのゲームはショートシナリオを集めたモノだから、今日は長時間パソコンの前に座ってなき

ゃいけないってこともないだろう。春姫ちゃんが私と一緒にデートしたいって待っているなら、行かないわけにいかない！！
服を着替えながら、一度、自分の体を見下ろして、
「……肌の手入れとか、もっと気を使わなくちゃダメかなー……」
奈々に今度助言してもらおう。そんなことを考えていた。

１０分後、目覚め１５分で準備してしまう私ってどうかと思うけど……まぁいいや。
薬や渡そうと思っていた小説など一式を持った私は、心配してくれた寮母さんにお礼を言ってから、寮を飛び出す。
走るな、走っちゃダメ、気持ちは分かるけど、今日は走っちゃダメですからっ！！
薄緑色のパーカーに白いブラウス、ジーンズにスニーカーという、相変わらず飾り気０％の格好ではあるけど（服を選ぶ時間が惜しかったんだと思って！　言い訳！）、これが私、沢城都なのだからしょうがない。彼に好かれる努力はしたいけど、私をひん曲げることはしたくないと思ってしまうから。
そんな私を受け入れてくれる薫は、改めて懐の広い奴だと思う。
大学沿いの細い路地をコンビニに向かって直進しながら、改めてそんなことを考えてしまった。
と、
「あ、かお……」
この道の終点は、大きな道と交わる三叉路になっている。国道沿いにあるコンビニが彼との待ち合わせ場所。その背中を見つけた瞬間、私は思わず声をあげて、
……息を、のむ。
彼が、背の高い綺麗な女性と話していることに、気がついてしまったから。

大切な場所（後書き）

初っ端から生々しい（？）エピソードでスイマセン……女の子は大変なんです！　あと、本文中に出てきたパソコンゲームのタイトルや内容から、この物語が何年前に書かれたのか察したあなたは凄い！（いるのか？）

ラバーソウル★

彼との距離は、１０メートルくらいだろうか。
いつもならサクサク近づくところだけど……足が、前に進まなくなってしまった。
視線の先にいるのは、薫と――私の知らない、女性。
位置的に彼らからは死角、私がココにいることなど気がつかないだろう。彼が女性と話しているのは、よく見る光景ではある。私も慣れているつもりだった、いちいち気にしていては、彼の彼女なんかやってられないのだから。
だけど……どうして、だろう。
今彼と話しているあの人は「違う」、何がどう違うのか分からないけど……そんな気が、して。
単なる直感だ。根拠なんか何もない。だけど……。
「――気になるんですか？」
「ひぇっ！？」
刹那、背後からいきなり話しかけられた私は、喉から変な声を出して振り返った。
いつの間にか私の後ろにいた美少女――林檎ちゃんが、コンビニ前にいる二人を睨むように見つめ、
「あの人……こんな場所にまで押しかけてくるなんて……！」
白のジャケットとミニのシフォンスカートが可愛い彼女なのだが、綺麗な顔に宿っているのは昼ドラの形相。扉の影からこっそり見つめているような……そんな雰囲気。
黒い、相変わらず黒いよ彼女。
「林檎ちゃん……あの人、知ってるの？」
「先輩とバイト先が同じ人です」
そっけなく返答した彼女は、くるりと回れ右をして、
「ボーっとしてると、寝取られますよ？」

いや、そんなこと言われなくても……っていうか、何気に過激な発言なんですけど！？

寝取られる……ゲームの場合、私は別に抵抗なく相手を奪っちゃって「ざまーみろ」とか思うんだけど、実際自分がやられたら、キツイだろうなぁ……。

ライバルである（だろう）私に最低限の情報しか教えてくれなかった彼女は、少し大またで遠ざかっていった。どうやら道を迂回するらしく、少し先で角を曲がり、見えなくなる。

あの二人の前を通りたくなかったのか……ってことは林檎ちゃん、あの人のこと、苦手なんだろうか？

薫がいれば誰が側にいても笑顔を作れる彼女にしては珍しい行動なので、しばし、その場にボーっと立ち尽くし、

「……そんなことない、よねぇ？」

寝取られる……それはやはり、薫がギャルゲー主人公体質である以上、避けて通れない危機なのだろーか。

その可能性を結構真面目に考えながらも……私は、足を一歩、前に踏み出すしかない。

「都！！」

コンビニ前、私の姿を確認した薫が、慌てて駆け寄ってくる。

「少し遅いから、心配してたんだぞ？」

「あ、ありがとう……歩くペースも少し遅くて」

まさかしばらく二人を見ていました、なんて言えるはずもなく……適当な嘘で誤魔化した。

と、

「おぉ、君が都ちゃん？」

位置的に薫の後ろから、私を覗き込むように見つめる美人さんが一人。

身長は……うを、薫と同じ位ってことは１７０センチ！？　女性にしては長身＝スタイル抜群、足が長くてジーンズが良く似合う。

目鼻立ちがはっきりした顔に、バレッタで右側にまとめたヘアスタイル。少しハスキーな声がカッコいい、仕事の出来る綺麗なお姉さんに見える。
あれだ、声優さんで言えば朴さんに近い。個人的に朴さんは男性キャラよりもお姉さんキャラの声を演じている方が好きだ。
けど、いいなー……私ももう少し、身長があれば……。
見上げると羨ましくなるだけだと分かっていても、見上げてしまう。
「話は新谷君から聞いてるよ。最近はノロケばっかりだけどね」
綺麗な顔ににやりと笑みを浮かべると、「やめてください」と薫がジト目を向けた。
……へぇ。
「あたしは藤原千佳。新谷君とはバイト先が同じフリーターで、年齢的には新谷君の1コ上かな」
男前な挨拶に、少し萎縮しながら自己紹介。
「沢城都です……」
どうしよう、目の前に完璧綺麗なお姉さんがいるのに、素直に萌えられない！
普段の私なら、この人に架空の職業を妄想して……脳内で色々楽しんでは満足するのに。（いや、それもそれでどうかとは思うけどね。やめられないのですよ）
きっと、スッチーの格好とか似合うだろうに……目の前のお姉さん――千佳さんを少し複雑な目で見つめる私とは対照的に、いつの間にか薫より前に出た彼女は、まじまじと私を見下ろして、
「んー……やっぱ、女の噂はあてにならんね」
何の話ですか？
「彼女、可愛いじゃない。誰よ、並以下とか言いふらしてる奴は。うっかり信じそうになっちゃったよ？」
それ、私が知りたい……いや、いいや、知らなくていい。世の中には知らなくていいことも沢山あるはずだ。

困惑するほど私を観察する彼女は、急に目線を顔から下へずらし、
「うーん……都ちゃんってスタイルいいんだね。半分は新谷君のおかげ？」
「えぇ、まぁ……」
「都、返事しなくていいから」
ぺしっと軽く突っ込み、ため息をつく薫。
何だろう、この二人の雰囲気……薫がまるで同性と一緒にいるときのような雰囲気になっているので、やはり、不安になってしまう。
――彼の素顔を引き出せる女性は、私だけだって……。
「ねぇ都ちゃん、ちょっと触らせてもらってもいい？」
「藤原さんっ！！」
刹那、びっくりするくらいの大声で私と彼女の間に割って入る薫。珍しい彼の行動に、心臓が大きく跳ね上がってしまった。
勿論いたずらで手を伸ばした千佳さんも、さすがに目を丸くして、
「……ハイハイ、邪魔者はさっさと退散しますから、後はお二人でどうぞごゆっくり」
両手を上げて一歩退くと、降参とでも言わんばかりの苦笑。
対する薫は、相変わらず私をガードするように彼女を見つめ、
「藤原さんは3時からバイトでしょう？　そろそろ行かないと遅刻すると思いますけど？」
「あーもー分かってるって。じゃあまたね、都ちゃん」
彼女はそのまま手を振り、くるりと方向転換をして大通りを歩き始める。
が、数歩歩いたところでも一度くるりと振り返り、
「新谷君、都ちゃんにはまだ秘密にしておいてね？」

……。

何だろう、この釈然としない思いは。
私は最後まで笑顔になれないまま、遠ざかっていく綺麗系お姉さ

んの後姿を見送っていたのだった。

「あの人はいつもあんな感じだから、気にしないでくれ」
部屋へやってきた私に、緑茶を出しながらため息をつく薫。
いや、気にないでくれって言われても……あったかい緑茶をすすりながら、ぽつりと呟き、
「……あんなに意味深な言葉を残されたら、気になるんですけど」
意地悪な私のままジト目を向ける。
「バイト先で色々あってさ。そのうち、笑い話になったら都にも話すから」
緑茶の入った湯飲みに口をつけ、それ以上語ろうとしない彼を横目で見つめた。
そして一度、ため息をつく。
私に出来るのは、横に座った彼を信じること。
悔しいけどそれだけ。それだけなんだから。
「都は、大丈夫？　生理痛がどれだけ辛いのか、俺にはさっぱりなんだけど……」
「相性のいい薬があるから、今のところ大丈夫かな」
鈍い痛みは消えないけど、胸の中にある不安も消えないけど、でも、
「……新作は？」
本日の目的を遂行するために彼を見上げると、
「いきなりですか」
苦笑を返される。
しかし、コレは譲れない。だって、
「だって今日は、はぴねすを探しに来たの。薫にだって、綾美からの本を渡そうと思って……」
言いながら脇に置いた鞄をごそごそと探す私を、彼はじっと見つめ、
「……妬けた？」

「さつまいもでも焼いてたの？」
「いや、漢字違うから。さっき、俺が藤原さんと一緒にいるとき、都、不機嫌そうだったなって思って」
当たり前でしょ。私だって……最近は彼の隣にいる美少女にばかり萌え萌えしてられないんだから！
ただ、しっかり気づかれていたことが悔しくて、少し背を向けたまま口をつぐんだ。そんな私を、彼が横から少し強引に抱き寄せて、
「――俺、また不安にさせた？」
「……」
「だったら、ゴメン」
分かってるつもりだった。彼の隣にいるためには、それなりの覚悟と図太い神経が必要で……でも、私なら、女の子大好きだから大丈夫だって、そう、思ってきたのに。
変わっちゃったんだな、私も。
「俺は、都しか見てないから」
「……そりゃどーも、ありがとーございます」
ぶっきらぼうな返事になってしまう。可愛くないけど……急に可愛くなれるような性格でもない。だってツンデレだし。
「信用してないだろ？」
「15分前まであんなに楽しそうに喋ってて、いきなり信じろって言われてもねぇ……」
少し意地悪に返すと、今度は彼が言い返せなくなる。
……そろそろ、勘弁してあげようかな？
私も、あまり意地悪になりたくはないから。
意地を張っても意味がないことは、私が一番理解しているつもりだ。
「……薫がそう言うなら、信じましょう」
「本当？」
「それを信じるか信じないかは、薫が決めることよ。んで……そろそろ例のモノを渡してもらいたいんですけど」

少し体を動かして強引に彼を見上げると、相変わらずの私に目を細めた彼は、
「もう少しじっとしててくれたら、な」
そっと、顔を近づける。
結局……私の不安なんか、彼は簡単に打ち消してしまうのだ。

そして、勿論この後は、

「……やっぱり彼女（彼）がメインのストーリーはないのか……」
メインヒロイン（だと、私は思ってる）の彼女のサイドストーリーを堪能した私だが……個人的に一番見たかったキャラのストーリーがなさそうな気配に、少し落胆。まぁ、彼女（彼）とやっちゃうと軽くＢＬではあるんだけど、でも、それを可能にするための魔法の使い方もアリなんじゃないかって思うんですがどうでしょう。（誰に聞いてるんだ私）
ただ……私は薫と一緒に下着を買いになんか行けない。絶対無理。私が無理。
つくづくギャルゲーヒロインは強いと思いながら、一旦セーブ。次は誰にしようか……画面を見ながら考えていると、
「なぁ、都」
ベッドに腰掛けて読書に没頭していた彼が、顔を上げて私を見つめた。
ちらりと薫が手にしている本の表紙に目を向けると、美少年と美青年が絡んでいて……下半身が本の帯に隠れて見えなくなっている。
あの帯を外したら……一体どんな光景が待っているのだろう。っていうか帯のアオリもどうなの？　「意地悪な指先」というそこまでひねりのない直球なタイトルにも関わらず、帯に書いてあるのは「秋の俺攻めフェア実施中！　俺様の指技に酔いな（はぁと）」って……いいのか？　色々版権とかその他とか漢字さえ変えちゃえば何でもありなの！？

ちなみに、攻めだと思われる彼の指先は、しっかり帯の下に隠れている。見たいような、見ないほうがいいような。
「これから、どうするんだ？」
「これから？　うーん……次を誰にしようか悩んでるのよね。あと、その帯を外すかどうか……」
「いや、そうじゃなくて」
本気の顔で返答する私に、「オイオイ」と突っ込んでから、
「これから……今日、泊まっていけるの？」
はっ！？
そ、そういうことか……本気で次のヒロインを考えていた頭を一旦リセット。
ダメだ、今日……調子が狂いっぱなし。間抜けな自分自身に失笑してから、
「でも、薫、今日は……その……」
忘れかけた現状を思い出し、口の中でごにょごにょと呟いた。
すると薫は、何やらにやりとした表情で私を見据え、
「俺は、都と一緒にいられればそれでいいんだけど……都は、違うの？」
「へっ！？　あ、それは……そうだね、うんっ！」
一人でやらしー妄想をしていることを指摘された気がして、我に返った私は急に萎縮してしまう。
なんだ今日の薫は。受けのフリしてしっかり攻めてるような気がするんですけどっ！？
わんこのよーにつぶらな瞳でじぃっと見つめられ、現在の位置的に見上げられ、たじろぐ。
「心配しなくても、俺も見境なく襲ったりしないし……多分」
「多分はやめて。絶対ダメだからね！」
その多分が非常に気になる＆１００％信用できないので念をおすけれど……私が、彼の差し伸べてくれた手を振り払うことなんか、出来るわけもなくて。

脳裏に笑顔で洗濯物をたたむ奈々が浮かんだ。彼女に後からメールをうっておかなければ。
今日は寮に帰らないから、洗濯物は明日取りに行かせて――って。
「……じゃあ、お世話になります」
「どうぞ。っていうか大歓迎だけど」
私に笑顔を向けてくれる彼に、また、胸が高鳴った。
慣れない、この人の笑顔にはいつになっても慣れない。女子には刺激が強すぎるのですよ。
一瞬で顔が赤面し、無言になってしまう。そんな私の変化に目ざとくなった薫が、首をかしげて尋ねた。
「やっぱり今日は大人しいよな。大丈夫か？」
真っ直ぐ見つめられると、少し体が熱くなって……痛い。
もどかしい。
いっそ、全部忘れて押し倒していーだろうか？
「……薫のせいだからね」
「？」
私は負け惜しみをはきすててから椅子ごと彼に背を向け、パソコンに向き直る。
結局……私は薫のことが大好きなんだと改めて自覚した、そんな時間だった。

ラバーソウル★（後書き）

林檎ちゃんが不憫だ……だけど、今回は千佳さんの独壇場なので諦めてもらおう！　そうしよう！

ちなみに、作中で都がプレイしてるゲーム……ファンディスクでは男の娘なあの子とキャッキャウフフな展開ってありましたっけ……知ってる方、情報求む！（ヲイ）

噛み合わないタイミング

ゲームをプレイするたびに、いつも、疑問に思っていることがある。

主人公は一人しかいない。基本、彼と恋人になれるのは一人だけ。色々例外が適応されるケースもあるかもしれないが、一人だけなのだ。

ヒロインが5人いる場合、主人公と一人が恋仲になれば、残り4人はどうするのだろうか。

彼女がいてもいい、それでも好きだと……果敢にアタックするの？

もしも、私が、その4人の中の一人だったら……そこまで一人に固執するだろうか？

もしも、私が、その4人の中の一人だったら――

「都、あんたバカじゃないの？」

平日昼下がり、いつものファミレス禁煙席。毎度おなじみの青袋を渡しながら、話をざざっと聞いた綾美が豪快に私を否定する。

今日の彼女は髪をアップにまとめ、珍しくTシャツにカーゴパンツ。アクティブな格好でも普通に着こなす存在感が羨ましいと思いながら、私は思わずジト目を向け、

「……ちょっとひどくない？」

しかし、綾美は強かった。ジト目を向ける私を鼻で笑い、反論する。

「そりゃ、あたしだって新谷君と知り合って間もないけどさ……彼が他の女と浮気？　あの明らかな、３６０度どっから見ても受けポジションの彼が、他の女と遊ぶ度胸とか余裕があるとは思えないわよ」

正論を突きつける彼女に、何も言い返せない私。

いや、事実その通りだし……。

彼女に小説を返す&新しい本を借りるために待ち合わせ。最初は世間話だったのだが、会話のネタが薫になり……私は思わず、一昨日の出来事を彼女に話していた。
彼が、バイト先の先輩と至極親しそうに話していたこと。
女性には一定の距離を取っていたはずの彼が見せた、特別な予感。
これって、やっぱり、想像したくないけど……。
いじいじとハンバーグをつつきながらバッドエンドを妄想してしまう。少し遅い昼食であるカルボナーラをフォークでくりくり遊ばせながら、綾美が私の話を脳内整理して、
「バイト先の先輩だっけ？　っていうか、女の影だけなら両手で足りないくらいあったんじゃないの？」
「そりゃそうなんだけど……でも、今回は違うのよ。普段は女性から一歩引いた場所にいるっていうか、自分から近づいたりしないはずなんだけど、今回は……違うの」
何の根拠もない、いわゆる女の勘ですが。
勿論、そんな根拠のない言葉では、彼女を揺るがすことなど出来るはずもなく、
「何がどう違うって言うの？　言っとくけどね……新谷君、私の前でも結構ぶっちゃけるわよ」
何ですと！？
綾美の意外な発言に、思わず持っていたフォークを取り落とすかと思った。
思い返してみても、薫と綾美が会っていることなんか……片手で足りる回数だろう。しかも、その現場で彼が綾美にぶっちゃけトークをしていたかと聞かれて思い返してみれば……答えは、否。
彼は相変わらずだったはずなのだ。少なくとも、私の知る範囲では。
か、薫……まさかとは思うけど……！
「親友の彼女に手を出すなんて、主人公属性でもリアルでは許されないわよ！？」

「……何言ってるのよ」
再び冷たい目を向けられるが、でも、だったら……薫と綾美、私の知らないところで会ってるってことですか！？
要するに、
「じゃあ、綾美にフラグ立ててるってこと！？」
昼のピークを過ぎた店内は、案外静か。店員さんや他の客さんの奇異な視線を気にすることもなく、私は顔面蒼白でその事実の真偽を問いただす。
「違うから」
妄想が暴走する私を、彼女が「落ち着けー？」と苦笑で呟き、
「考えてみなさいよ。あたしが都と会って小説を交換してるみたいに、新谷君も大樹と会って、ゲームを貸し借りしてるわけでしょう？　あんたのために」
……確かに。
「新谷君、大樹の家に来ることが多いのよ。その時に会って話すの。お互い好きなジャンルは同じなわけだし、彼は私の本の読者でもあるからね」
「……本当？」
「嘘だと思うなら、大樹にも確認してみる？」
ほれ、と、携帯電話を差し出す彼女に、私は首を横に振る。
っていうか。
「一つ聞いてもいい？　薫って……いつ、大樹君と会ってるの？」
断っておくが、私は別に、「二人がＢＬな関係！？」と疑っているわけではない。っていうかそんなの見たくない。
気になるのは……薫だって学校やバイトが忙しく、大樹君は彼で学校やバイトや原稿など、色々立て込んでいる日常を送っているはずだ。
私や綾美みたいに、昼間？
「新谷君、バイト帰りに遠回りしてくることが多いわよ。夜の大樹は８割方原稿やってるから、家にいるし。まぁ最近は、誰かさんに

会う時間を惜しんで、ゲームだけ交換したら早々に帰っちゃうんだけどねー？」
その瞳が、にやりと私を見つめた。
本当に知らなかったけど、でも、それってつまり……。
「……綾美、大樹君の家に入り浸ってるってこと？」
「だって、無料であんなに優秀なアシスタントは使うしかないじゃない」
即答だった。
そりゃそうだろうけど、でも……私が聞きたいのはそういうことじゃなかったんだけどなー……。
やっぱり私が綾美より優位になるためには経験値が足りないと改めて自覚する。
と、
「そういう新谷君を知っているあたしにしてみれば、彼を疑う方が可哀想だと思うわよ」
珍しく、綾美が彼の味方になった。
いや、本当に珍しいのだ。綾美は基本的に傍観者を好む。誰と誰が仲たがいしても、「あたしに関係ないじゃない。当人でケリつけなさいよ」とい突っぱねられるのがいつものパターンなのに。
「都、あんたが一番分かってると思うけど……彼、本当にあんたしか見てないわよ？　そんなの、誰の目から見ても明らかなの。
だから……これから仮にどんな現場見たとしても、都は彼を疑っちゃダメ。疑ったら都の負けよ。
それに、もしも……新谷君が都を裏切ったりしたら、その時はあたしに知らせなさい。あたしが人を見る目がなかったんだってことで、責任とってきっちり報復してあげるから」
物騒だけどカッコいい言葉をくれた親友に、私は軽く肩をすくめて、
「本当、私の周りには……カッコいい人しかいないわ。どうしよ、心ときめいちゃうじゃない」

幸せな悩みをまた一つ、抱えることになったのだ。

薫が主人公なら、私が5人の中の4人になることはない。

それだけを、信じていればいい。

綾美と別れて、講義を受けるため大学に戻る途中、

「……林檎ちゃん？」

「ひぇっ！？」

大学近くのコンビニ、扉の前でコンビの袋を片手にキョロキョロと周囲を窺っていた彼女に声をかけると、両肩を思いっきりびくりと震わせて可愛らしい声をあげる。

うん、お約束の反応って、大好きです☆

声をかけたのが私だと気づいた彼女は、そりゃーもう大げさにため息をついて、

「いきなり驚かさないでください……そういう趣味ですか？」

この間は私を驚かせたくせに、随分な言われようである。

「いや、私としても……単に声をかけただけでこんなに驚かれるとは思ってなかったんだけど？」

率直に返すと、彼女は閉口して俯く。

美少女の儚げな表情は、見ているだけで目の保養なのだが……。

「何かあったの？」

「……」

私の質問に、口を閉ざす林檎ちゃん。

これはもう、態度が肯定しているよーなものである。

「いや、私なんかに言いたくないとは思うけどさ、そんな明らかに「何かありました」みたいなオーラ出してるから、聞かなきゃなって思っちゃうじゃない？」

江原さんじゃなくても分かるから、さすがに。

私の苦言に似た突っ込みに、彼女は恐る恐る、私を見上げ……くそぅ、少し怯えた感じも可愛いじゃないか。（オヤジか）

「……貴女も、気をつけたほうがいいですよ」
ぽつりと、呟く。
「気をつける？」
「最近、この辺に変な人が出没するんです。女子大生に声をかけて、自分の部屋に連れて行こうとするって……」
まぁ、よくあると言っては語弊があるかもしれないけど、若者が多い地域では珍しくない話。
ただ……何か思い出したのだろうか、私に警告してくれた彼女の顔が青ざめた。
「ねぇ、まさかと思うけど……」
「……多分、さっき私が話しかけられた人だと思います。怖くなって逃げてきちゃったけど……でも、コンビニを出たらどこかで待ってるんじゃないかって思って、動けなくて……」
なるほど。私は容姿が普通オブ普通なので、そういう声かけとは無縁の人生を送ってきたけど、林檎ちゃんほどの美少女なら話は別だろう。私だってお持ち帰りしたい。（マテ）
目を伏せてうつむく彼女に、私は一度、呼吸を整えると、
「私は大学まで戻るけど、どうする？」
「え？」
「林檎ちゃんが戻るなら一緒に行けるし、バス停の方に行くにしても途中までなら大丈夫だし。移動するならご一緒しませんか？」
小さな買い物を済ませている彼女も多分、まだ、大学に用事があるのではないだろうか。これから始まる４限目の講義を受けるのかもしれない。
正直、この場所から大学までは目と鼻の先である。ただ……その距離を移動できないほど震える林檎ちゃんを放っておくなんてこと、薫の彼女としての私が許さなくても、沢城都としてのアイデンティティが許さない！
私の提案に彼女は一度苦い顔をしたが、背に腹は変えられないことを悟ったのか、しぶしぶ肩をすくめて、

「……よろしくお願いします……」
小さく頷き、隣を歩き始めたのだった。

コンビニから大学までは、徒歩3分。あっさり門をくぐって構内に入ると、横を歩く彼女が安堵のため息をついたのが分かった。
そんなに怖かったのだろうか……私も最近は一人歩きが多いから、気をつけないと。
微妙な間を保ったまま、構内でも講義室が集中している棟に向かって歩みを進める。
と、
「お、林檎ちゃんに都ちゃん？」
唐突に横から声をかけられ、二人同時に振り向いた。
視界の先には、二人の対照的な女性。一人は快活に私達へ向かって手を振り、もう一人は物静かに佇んでいて。
その一人は、先日私が遭遇した長身のお姉さん・千佳さんだ。もう一人の落ち着いた女性とは面識がないけれど……近づいてくる千佳さんに、露骨な嫌悪感を見せる林檎ちゃん。
女性にしておくには勿体無いほどカッコいいお姉さんは、相変わらずのボイスで私と彼女を交互に見つめ、
「珍しい組み合わせだね。二人は友達だったんだ」
「……ええ、まぁ」
私に代わって、林檎ちゃんが返答した。否定されると思っていたので正直意外。
状況を楽しんでいるような千佳さんを諌めるわけでもなく、隣にいる女性はただ、無言で見守っている。
儚いという言葉が似合いそうな人だな、と、思った。身長は千佳さんの頭ひとつ分くらい小さくて、背中を覆い隠すほど長い髪は天然パーマなのか、毛先がふわりと揺れる。肌も白く、余計綺麗に見える黒い瞳は静かに現状を見つめている。ただ、顔つきや雰囲気は私なんかよりずっと大人びていて……千佳さんとは違うお姉さんキ

ャラであることは間違いないだろう。
白いセーターとブラウンのロングスカートがよく似合う、やっぱり私とは色々正反対の立場にいる人。
自己紹介をすることもなく、私達を見つめる彼女。
気がつけば臨戦態勢の林檎ちゃんが、不機嫌そのものの視線を千佳さんに向けて、
「藤原さんは、何をしているんですか？」
「千佳ちゃんでいいよって言ってるのに。林檎ちゃんはつれないねぇ……」
「呼びませんからっ！」
大声で否定した彼女は、そのままフンと顔を背けて歩き始める。
場に取り残された私はどうしたものかと途方に暮れるのだが……先ほどの彼女が気になり、二人に軽く会釈して後を追った。
そんな私達を見送りながら、
「……若いねぇ」
「さっきの眼鏡の子が、彼女？」
今まで一歩退いた場所にいた彼女の問いかけに、千佳さんは首肯して、
「そゆこと。まぁ、あたしはもっと仲良くなりたいと思ってるんだけど……新谷君が、ねぇ」
ぽつりと呟き、苦笑を浮かべたのだった。

一方。
ズカズカという擬音がぴったりの大股で歩く彼女に、校舎の入り口でようやく追いついた私は、
「ちょっと……林檎ちゃん？　ねぇ、林檎ちゃん？」
「やっぱり私、あの人のこと好きになれません」
いや、林檎ちゃんの好き嫌いは自由で構わないんだけど、
授業の合間、生徒が慌しく次の教室へ移動する時間。人の往来が激しいこの場所で、彼女は少し、立ち止まったまま、

「……今日は、ありがとうございました」
私の顔を見ずに、ぼそりと呟く。
ただ、私が言葉を返すよりも早く、
「あの人にだけは、先輩を渡さないでくださいね！？」
顔を上げた彼女の言葉に条件反射で頷くと、そのまま私とは別方向へ走り去っていくのである。
えぇっと……。
「……そりゃあまぁ、努力はするけど……」
取り残された私は、不可解な彼女の行動の真意を何も理解できず……チャイムが授業開始を知らせるまで、立ち尽くしていたのだった。

何だか色々あって、よく分からない一日。
さすがに3日目、生理痛はある程度おさまってきたけど……痛みがないかと言われれば、否。
ただ、今日も、薫の顔は見ておきたくて。
4限目終了後、時刻は午後4時過ぎ。私は自然と彼のマンションへ向かっていた。
私は今日、知人にバイトを代わってもらったのだが、今日の薫は確か夕方からバイトだったはず、タイミングが合えば、丁度部屋から出てきた彼に遭遇できるはずだ。
タイミングがあえば、だけど。
まぁ、仮に会えなくても……彼の部屋でゲームの続きが出来ることに変わりはないので、別に構わないのだが。（構わないのか、私）
薬の切れた体を少し引きずりながら、私は、その入り口までやって来て。
鉢合わせしてしまったのだ。
エレベーターから降りてきた、薫と……千佳さんに。

噛み合わないタイミング（後書き）

タイミングが最悪なのはお約束ですよねー♪

想い

どこまで前向きに解釈しようか？　どこまで自分に都合よく解釈しようか？

二人仲良くエレベーターから降りて出てきた……こんな光景、見せ付けられて。

軽く立ち尽くした私の姿に気が付いた薫は、

「都……どうしたんだ？」

ど、どうしたんだって……ちょっ、この状況でよく平然とそんなこと聞けるよね！？

あまりにも普通、動じるわけでも開き直るわけでもない彼の態度が、私は理解できなくて。

私は感情を押し殺し、真っ直ぐ彼を見据える。

「やりかけのゲームの続き、やらせてもらおうと思って」

声が震えなかったのは立派だと思いたい。

「でも都、今日はバイトじゃないのか？」

私がバイトだってことを知ってたから、私が今日は来ないと思ったから……先輩を部屋に連れ込んだってこと？

今まで二人っきりで……何を、してたの？

「代わってもらったの。まだ本調子じゃないし」

「そっか……大丈夫か？」

「うん。二人はこれからバイト？」

私がちらりと彼女を――千佳さんを見やると、彼女は笑顔で首肯して、

「都ちゃん、誤解しないでね？　あたしは別に、新谷君を奪おうとか、そんなこと考えてるわけじゃないから」

私を挑発するような言い方に一瞬カチンときたけど、ココで切れると全てが台無しになるような気がして、

「大丈夫です。私、彼を信じてますから」
信じてる、この事実に嘘はない。ただ……。
エレベーターは1階で止まっているので、ボタンを押せばすぐに扉が開いた。
私は彼らの間をすり抜けてエレベーターに乗り込み、４階のボタンを押して、
「じゃあ、後は勝手にさせてもらうから……バイト頑張ってね、“新谷氏”」
「みやっ……！」
扉が閉まる。
……私なりの抵抗は、後から考えると至極惨めな気がした。

慌てて私の後を追おうとした彼だが、
「新谷君、今日はバイト休んじゃダメよ？　店長が過労で死んじゃうから☆」
笑顔で腕を引っ張る千佳は、そのままマンションを出て裏にある駐輪場へ彼を引きずっていく。
力の差は歴然。彼の抵抗など彼女にとっては痛くも痒くもないらしい。
「さー、今日も元気に頑張りましょー♪」
「5分でいいんです、遅刻するって伝えて……うわぁっ！」
転びそうになっても、彼女は腕を離してくれない。
「都ちゃん、信じてるって言ってくれたからいいじゃない」
「あんなの口先だけです！　それに俺は……！」
「悪いけど、君に休まれると困るのよ。それに……どうせ彼女、新谷君が帰ってくるまで部屋にいてくれるでしょ？　誤解ならその時解けばいいじゃない」
「ですけど……！」
往生際の悪い彼に、見かねた彼女がため息をつき、
「……ココで壊れるような関係なら、それ以上先のことなんか考え

る必要ないじゃない」
その言葉に、閉口する薫。
立ち尽くす彼の肩を、千佳さんはポンポンと叩き、
「ま、とりあえずあたしは原チャリだから……また後でね、新谷氏？」
エンジンをふかして走り去る後姿を見つめながら……薫は、自転車の鍵を握り締め、
「……バイト、行くか」
一度だけ部屋のほうを見上げ、きびすを返した。

逃げるように部屋へ飛び込んだ私は、扉を閉め、鍵をかけてから、
「……はぁっ……！」
玄関に座り込み、ため息をつく。
正直、薫は追いかけてきてくれると思った。だけど……足音は聞こえない。私を呼ぶ声は、聞こえない。
ゲームみたいな現実が、いつも訪れるとは限らない。もしもこれがバッドエンドへのフラグだとしたら……私に何が出来るだろう。
ふと、テーブルに目線を移すと……そこには片付け損ねたマグカップが二つ、二人の座っている位置を示すように置かれていて。
向かい合って座ってたんだろう。きっと、色々話が盛り上がって、それで……バイトに行かなくちゃならない時間になったから、片付けもそこそこに二人で出てきた。
怖くて、これ以上部屋に踏み込めない。もしも、これ以上の何かを発見してしまったら、私は――
「……信じるって……結構キツイかもなぁ……」
ぽつりと呟いた本音が、誰もいない室内に響く。
彼を信じていることに何の疑いもない。だけど……いつも、そんなに強い意志を持ち続けられるわけでも、ない。
信じてる、そう思いたいだけなのかもしれない。だけど……。
「大好きなんだから……しょうがないじゃない……！」

思い出すだけで悔しくなる。動揺していたのは私だけで、薫と彼女は……清々しいくらい平然としていて。
私の思いだけが募っているみたいで、一方通行みたいな気がして……悔しい。
顔を上げて、部屋の奥を見据えた。
私を待つパソコン。やりかけのゲームがあるのは事実なので、少しくらい続きを進めても薫は帰ってこないだろうし……。
ヒロインは私を笑顔で迎えてくれる。私を受け入れてくれるだろう。
だけど、今、私が一番受け入れてほしいのは――笑顔を向けてほしいのは、考えるまでもなく、
「……帰ろ」
さすがに、そんな気分にはなれなかった。

寮に戻った私は、そのままフラフラと自室のベッドに転がった。
腹部の鈍い痛みが消えない。天井を見上げ、何度目か分からないため息をつく。
と、
「都ちゃーん、いるんだよねー？」
扉の向こうから奈々の声がする。私は上体を起こして返事をすると、扉が開いて洗濯物を抱えた彼女が顔を出し、
「はい、奈々の洗濯物デリバリー……って、まだ調子悪いの？　大丈夫？」
綺麗にたたんでくれた洗濯物をベッドの上に置きながら、奈々が私を心配そうな顔で覗き込む。
「薬、のんだ？」
「うん……一応」
「そっか。じゃあ、しばらく大人しくしておくしかないね。奈々セレクトの少女漫画、持ってこようか？」
彼女の提案に、私は首を横に振る。今は、彼女が選ぶ恋愛モノの

漫画に浸りたい気分じゃないから。
多分、浸れないから。
「……新谷君と、何かあった？」
ベッドにひょいと座って、優しい顔を向けてくれる奈々に、
「ねぇ、奈々……」
私は思わず、これまでのことを打ち明けていた。
彼が私に隠し事をしているんじゃないかという疑惑、私以外の女性が彼の近くにいるという事実。
……抑えられない、不安。
「まぁ、相手が新谷君だからねー……都ちゃんもいつかはそういう悩みを抱えるんじゃないかと思ってたけど」
話を一通り聞いてくれた奈々が、苦笑で頷いて、
「都ちゃん、そんな頑なにならなくてもいいと思うよ」
「頑なになってる？　私が？」
「新谷君を疑うこと、当然だと思う。だって、悪いのはそういう態度を取っている新谷君だもん。都ちゃんも無理して彼を１００％信じることはないと思うんだよ」
彼女の意外な言葉に、思わず目を丸くした。
目からうろこの私に頷く彼女は、ぴっと指を立てて言葉を続ける。
「都ちゃんが新谷君を信じたい気持ちは分かるよ。だけど、それで都ちゃん一人が無理することないよ。新谷君だって、都ちゃんが無理してるんだって知ったら……絶対、本当のことを教えてくれるはずだよ。新谷君は嘘に嘘を塗り重ねるような人じゃないって、奈々は思ってるからね」
「教えてくれる、かな……」
少し不安だった。前に一度、私は彼に踏み込むタイミングを計りきれずに……何度も泣いたのだから。
あのことがあってから、正直、彼との距離をどこまで近づけていいのか、たまに考えてしまう。
近づきすぎると、彼は私を拒絶しないだろうか？

だけど、遠ざかると……彼は、私を追いかけてくれるだろうか？
彼は、どこまで私を求めてくれるだろうか？
どこまで……私に自分をさらけ出してくれるだろうか？
一度考え始めると、答えなんか出てこない堂々巡り。だけど、横に座っている奈々は、そんな私を否定するような笑顔で見つめ、
「教えてくれるよ。だって……」
だって、
「新谷君、今、扉の向こうにいるんだもん☆」

……何ですと！？

一瞬心臓が止まった。止まるかと思った。
気が付けば私に意地悪な表情を向けている奈々が、親指で扉の向こうを指差し、
「さっき、寮の入り口の所でウロウロしてたから……思い切って声かけちゃった。別にいいよね？」
「よくないよくない何してくれるのよ奈々ってば！！」
あのスイマセン、コレが事実だったら……シャレにならないんですけど、色々。
私が彼を自分の部屋に呼べない理由、それは、私の掃除力が欠如していることに原因がある。
今の状況も、2日前よりは――実は昨日奈々にけしかけられ、少しは片付けたのだけど――マシとはいえ、それはあくまでも「2日前」、比べるのが最低の状態なのならば、改善されないほうがおかしい。
だから、多分今の状況を一般論を比べると……マシじゃないってことになるんだと思うけど。
「お部屋を日頃から片付けておかない都ちゃんが悪いんだよ？」
「いやそれはその通りなんだけど……う、嘘で、しょ……？」
この部屋の惨状を知られたら、彼はどんな顔をするだろーか……。

幻滅？　それだけならばまだマシ？
心臓の音が頭の中まで聞こえる。顔が赤くなり、情報処理が追いつかない。
「嘘だと思うなら、呼んでみれば？」
呼んで声が返ってこなければ奈々の首を絞めるだけで終わるのだが、もしも、声が返ってきたら……。
もしも今、彼が、扉の向こうにいるとしたら――！
「新谷君、ずっと廊下で待ちぼうけなんだから……可哀想だよ？」
「あ、あの……薫、いる、の？」
恐る恐る声をかけてみる。
すると、
「……そろそろ中に入れてもらえるとありがたいんだけど、“沢城”？」
苦笑した彼の返事に、私は逃げ場がないことを悟ったのだった。

想い（後書き）

ここから新谷氏のターンです！　個人的には奈々が欲しい…。

「じゃあ、お邪魔虫は退散させてもらいます。あ、奈々はこの部屋に誰も近づかないように戒厳令を言いふらしてくるけど……でも、あんまり声出しちゃダメだよ？　寮の壁は薄いんだからね☆」
「奈々ぁっ！！！！」
開いた扉、してやったりという表情で部屋から出ていく奈々に大声を上げても、彼女が戻ってくるはずもなく。
「新谷君……都ちゃんのこと、頼んだからねっ」
扉の前で立ち尽くしている彼の背中を押して、半ば強引に室内へ押し込むと……そのまま、扉を閉めた。
目まぐるしく変わっていく現実。彼女がこんなにアクティブだったことに驚きを隠せないのだが、今は……それよりも……。
「……都」
私の部屋、目の前に広がる惨劇。普段は自室を完璧に整理している彼――薫は、引きつった顔で彼を見つめる私を、本気で呆れた表情で見下ろし、
「……コレ、男の台詞じゃないとは思うけど……」
「な、何……？」
どこからともなくゴミ袋を取り出した（まぁ、奈々の仕込みだろうけど）薫が、床に積み重なったプリントの束をつかんで、一言。
「ったく……都には、俺がいなくちゃダメみたいだな」
……ごもっともでございます。
普通は世話好き幼馴染系キャラ（♀）が、主人公に嘆息しながらツンデレ風味に呟く台詞を、すっかり諦めた薫が目を細めて呟く。
そして、硬直して動けない私を見下ろしたまま、
「都、動ける？」
「う、うん……少しくらいなら……」
びくびくしながら頷くと、彼は笑顔で手を伸ばした。

「じゃあ、一緒に片付けるぞ」

奈々は……このために彼を呼びつけたんじゃないだろーか……。

薫と一緒に部屋を掃除しながら、彼女の策にはめられたような気がしてならないのである。

黙々と片付けること30分。部屋にあるモノはほとんどゴミなので、片っ端から袋に叩き込むだけである。

ただ、

「しっかし……都さん、机の陰からこんなものが」

「え？　あーっ！！　それ、ずっと探してた初回限定版小冊子！！」

しゃがんだ姿勢で片づけをしているのだが、彼がひょいと掲げた冊子に、子犬のごとく飛びつく私。

それは某ゲームを予約したときにもらった限定冊子で、下着姿のキャラクターがどばーんと表紙に描かれている、年齢指定漫画雑誌と思われてもしょうがない代物である。

露骨に表へ出しておくわけにもいかないので、隠してから早数ヶ月。ずっと探していたけど見つからなかった一品と運命の再会を果たし、絶対捨てるなと目で訴える私に、薫からの視線が……痛い。

「……都……さすがに少しは恥ずかしがってほしいというか、「み、みないでよ！」って頬を赤くしながら言ってほしいというか……」

「だってコレ、今となっては本当に貴重なのよ？　ヤフ〇クでも高値で取引されてるんだから」

思わずパラパラと中身を読み返してしまう。だって、掃除してるときって無性に漫画本を1巻から読み返したくならない？

あぁ～……この魔女っ娘なヒロインが一番好きだった。このゲストイラスト描いてるイラストレーターさんも、今では業界の人気ナンバーワンになっちゃったんだよねー……そんなに昔のことではないけど、何となく懐かしい。

すっかり掃除を放棄した私に、呆れる以外の感情が出てこない薫。

「いや、俺が言いたいのはそういうことじゃなくて……って、まだ

あるぞ、ほれ」
「えぇっ！？　あーよかった……間違って捨てちゃったのかと思って、諦めてたのよね」
更に私のお宝コレクションを発掘してくれる薫は、笑顔の私に残り数冊を渡しながら、
「本当に……しょうがない奴だな、都は」
不意に――私の頭に手をのせ、頬を緩める。
彼が至近距離にいることを自覚して、思わず頬が紅潮した。
「そういえば、薫……バイトは？」
「無断欠勤」
しれっと言い放った言葉だが、その中に聞き捨てならない事実がある。
「ちょっ……！　ダメだよそんなの！　今からでも遅くないから――」
私のせいで、薫にそんなことをさせたくなかった。ただ、
「嘘だよ。実際は、ちょっと身内が病気になったから看病してくるって、俺しかいないんだって店長を泣き落としたんだ」
泣き落としたのか。薫……君はいつの間に、そんな高等技術を？
っていうか男の泣き落としに屈したのか店長さん。
「でも……身内って……」
「俺は間違いじゃないと思ってるけど、違うの？」
意地悪に聞き返す彼に、言い返せない私。
「それに……都には、誤解したままでいてほしくなかったから」
「……薫のせいだよ？」
憮然とした表情で呟く私の額に、彼がそっと手を当てて、
「分かってる。だからこうして、ちゃんと話を聞いてもらおうと思ったんだ。都にまた、辛い思いをさせたくなかったから……多分させたと思うけど」
そのまま自分の額をくっつけて、「ゴメン」と一言。
そして、

「藤原さんのことだけど……俺があの人と浮気とか、ありえないから」
「ありえないって言われても……じゃあ、さっき、一緒にエレベーターから降りてきたのは？」
部屋の中で発見したマグカップに関しては追求しないことにする。そこまで言わなくても、薫は……本当のことを教えてくれるはずだから。
上目遣いで説明を求める私に、彼は「いいか都、俺は絶対嘘なんかつかないからな」と、念を押して、
「藤原さん、女じゃないぞ」
「……は？」
彼が何を言っているのか分からなかった。
思いっきり目を丸くして呆然とする私に、「信じられない気持ちは分かる、だけどな……」と、薫は言葉を必死で選びながら続ける。
「普通に考えて、俺が都以外の女性と遊ぶような余裕や度胸があると思えないだろ？」
それ、誰かも同じようなこと言ってたけど……でも、自分で言っちゃうんだね、薫ってば……。
「……仮にその話が本当だったとするわよ」
「いや、事実なんだって」
「いきなりあんな美人でカッコいいお姉さんが男でした、なんて言われて信じられると思う！？　お姉さんだと思ってたのがお兄さんだったなんて……「お〇ボク」じゃあるまいしっ！！」
じゃあ、私があの人にそこまでときめかなかったのは……あの人が男性だったから、というオチ？　今から私はあの人を「おねにーさま☆」って呼べばいいの？　そういうことなの！？
空想としか思えない彼の言葉に、私は怒りを通り越して呆れてし

まう。
それに、
「それに……だったら薫は現実でもＢＬってことなの！？」
「違うから！」
業を煮やした薫が私の口を強制的に塞ぎ、そのまま、抱きしめる形で床に座り込む。
少し強引なキスに流されること数秒、呼吸を整える私を、彼が少し怒ったような（いや、怒られるのは私なの？）顔で見据え、
「……俺だって、嘘ならもっとマシなこと言うよ」
確かにその通りなんだけど……。
釈然としない私を、彼はそっと抱き寄せて、
「正直に言う。今日、藤原さんを部屋に呼んだのは……アドバイスがもらいたかったからなんだ」
「アドバイス？」
「都は会ったことないか？　俺たちと大学が同じで、よく隣にいる……ある意味藤原さんとは対照的で、物静かな女性なんだけど」
思い出すのは、今日……林檎ちゃんと一緒にいるとき出会った、実際は会話をしたわけでもないんだけど、私達を見つめていた、ちょっとミステリアスなお姉さん。
「その人、上田真雪さんっていうんだけど……藤原さん、上田さんとルームシェアしてるんだよ」
「ルームシェア？」
って、二人以上で一緒に住むこと、だっけ？
まぁ……家賃半額の方が一人暮らしより安上がりとか、そういう利点があるのは分かる。だから、同性なら珍しくもないけど。
「ちょっとまってよ、薫の話を信じるなら……」
「藤原さんは藤原さんで、昔色々あったみたいだから。その時自分を受け入れて助けてくれたのが、上田さんだって聞いたことがある」
過去に色々あったとしても……それで世間が、というより親が納得してるんだろうか？　同棲（いや、違うかもしれないけど）なん

て実際、色々問題があるんじゃ……。
……同棲？
私の中に浮かんだ可能性が、一つ。
どうして薫が、千佳さんにアドバイスをもらいたかったのか。
まさかと思った。いやまさか、いくら薫でも、そんなこと考えてるなんて……私じゃあるまいし。
答えを知りたくて、今度は私から彼を抱きしめる。位置的に私の耳元にある彼の口が、躊躇いながら言葉を紡いだ。
「……俺も……いつか都と、って……思ってる、から……先輩からのアドバイスってことで、色々聞いてたんだよ。まぁ、藤原さんたちの場合は事情が特殊だから、あまり参考にはならなかったけど……」
彼の言葉を、もう一度、頭の中で再生する。
「……嘘……」
ぽつりと呟いた言葉は、私の正直な思いだった。
「嘘じゃない」
「だ、だって……そんな、そんなに都合のいい展開があるわけ、あるわけないじゃないっ！　そんな、の……」
脳内が沸騰して破裂するかと思った、それくらいの衝撃。
素晴らしい現実を否定する私に、彼がため息をついたのが伝わる。
「都は俺を信じてくれるんじゃないの？」
「そうだけど、でも……」
「今回も……俺が紛らわしい態度だったのが悪いのかもしれないけど、俺だって藤原さんに口止めされてたんだ。あまり自分のことは人に喋らないで欲しいって。誰かに喋ったって知られたら、あの人からのお仕置きが待ってるんだぞ、俺」
「おっ……！？」
その甘美な言葉に、私は目を見開く。
案の定、その反応の意味を察した薫は、「いや、変な妄想しなくていいから」と、的確に突っ込んで、

「都に誤解される方が、お仕置きよりずっと辛いから。だから都、俺が都に喋ったって言わないでくれよ？」
腕の力が――というより体中の抜けた私の両肩を掴んでその場に座らせ、そのままじっと、私を見つめる薫。
そして思った。林檎ちゃんが千佳さんを嫌悪している理由が、千佳さんが男性あることに起因するのだとしたら。
さすがにバイト先の人は千佳さんのことを知っているだろう。林檎ちゃんにしてみれば変態やヲタクとある意味同レベル、そんな、見た目綺麗なお姉さんである彼が、最近、ＢＬ疑惑の浮上した先輩に近づいている……。
……そりゃあ私だって、好きな人（♂）を男性に寝取られたくはない。
初対面のとき、私に触れようとした千佳さんを制した薫の態度にも、納得せざるを得ない。
何だか……こう考えてみると、色々納得してしまうんだけど。
「……薫がそんなこと考えてるなんて、知らなかったよ」
真っ直ぐ見つめるのが恥ずかしくて、私から視線を下にずらした。
「都ばっかり通わせるのは申し訳ないと思ったんだよ。最近はこの辺も物騒だし……だけど、俺が都の部屋に行こうとすると、頑として拒否するし」
ぐさ。
「その理由は、今日、ようやく分かったけど……でも、都、やっぱり今度から少しは……」
「分かってます分かってますからっ！！」
彼の口から直接言われるのが嫌で、強制的に割り込んだ。
あぁ～……やっぱり私、ヒロイン無理だわ。
がくりとうなだれる私の肩を、薫はぽんぽんと叩いて、
「まぁ、任せとけ。俺の趣味は整理整頓だから」
「……初めて聞いたんですけど」
「でも、これでお互い隠し事はなし、だろ？」

彼の言葉に、私は顔を上げる。
私を見つめる薫は、前よりもずっと……優しい目で、
「今日は、俺がココに泊まってもいい？」
「へ！？　あ、いやあの、それは……」
別に構わないんだけど、寮則に引っかかるようなことでもないんだけど、その……心の準備というか、何それ今更って言うかっ！！
突然の攻撃に防戦の私へ、薫の綺麗な笑顔が追い討ちをかける。
「一晩あれば、この部屋の掃除も終わるだろうし。二人でやっちゃえば早いよな。
ってことで都、とりあえず一旦ゴミを出すぞ。その後は床を雑巾がけして、シーツを変えて……あ、ここの洗濯機でシーツは洗えるのか？　乾燥機は？　っていうか都、洋服はハンガーにかける！椅子の上にかけたりするなっ！！」
「もう勘弁してください……スイマセンでした」

結局その日は、遅い時間まで部屋の大掃除。途中から奈々も参戦し、「仲直りした二人へ、奈々からのプレゼントだよー」「い、Ｙｅｓ／Ｎｏ枕！？」という、なんとも私の友人らしいボケ（ボケなの、ボケで片付けるの私！？）をかましたりして……気が付けば時計の長針と短針がぴったりくっついてる、そんな時刻。
「……本当に勘弁して……」
ベッドの上に伸びた私が、情けない声で降伏した。
「まぁ、夜も遅いし……この辺で勘弁してやるか」
騒ぎを聞きつけた寮母さんから服が汚れないようにと割烹着を支給され、奈々と共にそれを着て頑張っていた薫が……ふぅと額の汗をぬぐい、周囲を見渡す。
……割烹着が非常に似合ってるんですけど、薫。
彼のそんな姿を見るためにギャラリーも大集合。寮内は一時騒然としたのだが……奈々も自室に戻り、すっかり整理された私の部屋に、二人きり。

「薫……戦うメイドさんじゃないんだから……」
「そういうキャラ、確かいたよな？　えぇっと……そうだ、あふろさん？」
「まほろさんよっ！！」
私のまほろさんを愚弄するとは笑止千万！
思わずくわっと顔を上げた私に、彼は着ていた割烹着を脱ぎながら釈明。
「悪い悪い。やっぱりどうも、そっちは範囲外で……」
それを綺麗に折りたたむと、一旦ベッドの上に置いた。
そして、
「都」
「何？」
自分もベッドの縁に腰を下ろし、転がっている私を見下ろす。
「バイトを休んで部屋を完璧に掃除した俺としては、御褒美とか欲しいんですけど」
「……綾美の新作でいい？　冬コミにも個人本は出すって言ってたし」
薫が喜びそうなものを具体的に提案するも、彼は「それはそれとして」と、否定も肯定もしないまま私を見下ろし、
「俺が欲しいもの、分からない？」
「今、どのシリーズ読んでるんだっけ……今度リストアップしといてよ……」
ベッドに転がっていると、眠たくなってくる。
今日は今日で、色々あったからなぁ……すっかり清浄化された部屋の空気は、私に快適な眠りを提供してくれそうだ。
眠くなっている私を見下ろしたままの薫は、その瞳を少しだけ細くして、
「……都なんだけど」
「ダメっす」
即答するしかなかった。

伸ばしかけた手を硬直させる薫を、今度は私はじぃっと見上げて、ずばっと。
「私、本調子じゃないし。今日は我慢して」
「……やっぱ、ダメ？」
負けじと食い下がる薫。
「ダメっす」
二度目の否定。さすがに彼も諦めたのか、「……スイマセン、俺のワガママでした」と、深いため息をつき、
「じゃあ俺、帰ろうかな……」
「それもダメっす」
三度目の否定。私はその場に起き上がると、自分から彼に軽くキスをして、
「……話したいこと、色々あるんだ。奈々のこととか、綾美のこととか、私のこと、とか……。だから……」
だから。
「私は……一緒にいたい」
正直な思いを、そのまま伝える。
後先のことなんか何も考えてなかった。明日の朝、どれだけ奈々やみんなに冷やかされてもいい。
私は……一緒にいたい。それ以上でも、それ以下でもない。
自分でも頑張ったと思う、そんな私を見つめる薫は、顔を真っ赤にして視線を泳がせていたが……不意に、
「へ？　あ、ちょっ……うわっ！？」
私の上に覆いかぶさるようにしてベッドに倒れこむと、そのまま私を抱きしめて、呟く。
「……都はこれ以上喋らないでくれ、お願いだから……」
「え？　喋っちゃダメって言われても……」
ついさっき、薫に色々話したいと言ったばかりなんですけど私。
混乱する私を強引に黙らせるように、腕の拘束が強くなる。
「……一緒にいるから。だから、お願いだから喋らないでこのまま

寝てくれっ！」

それはきっと、彼に出来る精一杯の警告だったのだろう。

結局私はそのままぐっすり。薫の苦悩など微塵も感じないまま、幸せな夢を見ることが出来たのだった。

ホームメイドとおねにーさま。（後書き）

おねにーさま……この言葉が分かる方は私と同世代ですねっ！
片付けが出来ない女の子は、霧原のことではありません、ええ決して。

性別は「藤原千佳」

「……あーあ、新谷君、喋っちゃったのか」
彼女――ってことにしておこう――は嘆息しながら、ちらりと私を見やり、
「で、こんなあたしに何か用ですか、都ちゃん？」
私に向かって、女性より綺麗な笑みを向けたのだった。

昨日、薫に衝撃の事実を告げられてから……やっぱりどーしても、真偽が気になってしまう。
だって、だってだって、私よりも綺麗なこの方・千佳さんが男だなんて……そりゃあ最近は桜塚〇っくんとか、女性顔負けの男性が台頭していることは事実だけど。
……桜塚やっ〇んかぁ……芸人としてより声優としての印象が強いのは、私だけなんだろうか。
まぁ、それはさておき。
最近頻繁に大学周辺をうろうろしている彼女（彼女でいいや、とりあえず）を見つけるのは、そんなに難しいことじゃない。今日も昼休み、のんびり構内をうろうろしていた千佳さんに近づき、さりげなく話しかけた。
幸いなことに、向こうも私には興味があるらしく……そして、今、
「にしても、都ちゃんから話しかけられるなんて思わなかったなー」
二人して構内のベンチに缶コーヒー片手に座り、澄み切った秋晴れの下で談笑する、予定。
今日は髪を下ろし、美脚ジーンズを私よりも華麗に着こなしている（私も今日、色違いのジーンズ着用なのだが……圧倒的に敗者の気分）千佳さんは、足を組みなおしてにやりと笑みを浮かべ、
「新谷君にはお仕置きしないと、だね」
「あ、一応薫からは口止めされてるんです。それに彼、あんまし打

たれ強くない気がするので……」
この方の「お仕置き」という言葉が具体的に何を指すのか知らないが、嫁入り前の薫のトラウマになってしまったりしたら、色々大変だ。
何とかならないかと目で訴える私を、彼女は豪快に笑い飛ばして、
「大丈夫だって、さすがに無抵抗の人間をいたぶる趣味はないつもりだから」
その微妙な表現がそこはかとなく怪しいんですけどっ！？
薫が今日、バイト先から無事に帰還することを願う私を、千佳さんは相変わらず、優しい表情で見つめている。
近くでよく見ると……確かに、女性よりも堀が深い顔立ち。肌はきめ細かいけど、首も太いし、肩幅もがっしりしているし……。
「……あたしのこと、変だと思う？」
「え！？　あ、いや……まじまじと見つめたりしてスイマセン。彼が言ったことが本当だったんだなって思っただけです」
慌てて釈明する私に、「いや、それが当然の反応だから」と、明るく笑ってくれた千佳さんは、
「都ちゃんに不安な思いさせてることは分かってたから、近いうちにあたしから話さなくちゃって思ってたの。あたしは確かに、生物学的には男。実際手術なんかしてないから生殖器も残ってるし、油断してるとヒゲが伸びてきちゃうしね」
そのまま顎を指差し、苦笑い。
「……本当に本当なんですよね？」
疑いの眼差しが消えない私に、さすがの千佳さんも「オイオイ」と呟き、
「本人がそう言ってるのに、都ちゃんは信じてくれないの？　じゃあ、胸を触ってみる？　今はシリコンパッドの入ったブラをつけているから、確証を持てるかどうかは保障できないけど……」
なるほど、そのふくらみはシリコンパッド。
さすがに触る勇気までは持てなかったのだが、改めて千佳さんの

全身を見つめ、正直に返事をする。
「だって、私よりずっと綺麗な人が男性だ、なんて……」
……「お〇ボク」じゃあるまいし。
フェードアウトした言葉をごにょごにょと口の中で呟くと、持っていた缶コーヒーを一口すすった千佳さんが、不意に、
「正直に答えて欲しいんだけど……あたしのこと、変だと思う？」
「どうしてですか？」
「普通に考えて、おかしいと思うの。今まで散々否定されてきたし……多分、これからも否定されるだろうし……」
否定、か。
そりゃあ確かに……今の千佳さんは、社会から友好的に受け入れられる存在ではないのかもしれない。
だけど、ねぇ……。
「私は特別、変だと思ってませんけど」
世の中には色んな個性を持った、趣味思考を持った、もしくは隠しながら生きている人間が多いことを、私自身が誰よりも理解しているから。
……いや、千佳さんはきっとマシですよ。少なくとも、私の目の保養だし。
何の躊躇いもなくさらりと言い放った私に、彼女は一瞬驚いたような表情になり、
「都ちゃん、気を遣わなくていいんだよ？」
「いや、本当にそう思ってるんです。千佳さんより世間的には「普通」じゃない友人が、私には結構多いですから」
綾美とか大樹君とか林檎ちゃんとか……薫とか。っていうか薫とか？
「むしろ千佳さんは大分マシだと思いますよ？　他人をおもちゃにして壊れてもいじり倒す、あの人畜有害なカップルに比べたら……」
……綾美とか、大樹君とか。
疲れた表情で呟く私の肩を、千佳さんはポンポンと叩いて、

「……苦労してるんだね、若いのに」
「そうなんです、聞いてくださいよ千佳さん……私と薫共通の知り合いにカップルがいるんですけど、その二人がことあるごとに私達をいじり倒して……」
まぁ、彼らから得る物も大きいのだが、精神的な被害は計り知れない。
大樹君とは最近会えていないけど……出来れば、綾美が一緒じゃないときに会いたい。あの二人を一緒にすると、色々問題がある。
（私と薫にとって）
しかもあの二人、最近は私と薫を自分達のアシスタントとして養成しようと画策しているらしいのだ。いや、あの二人の生原稿を拝めるのは嬉しいけど、でも、間違いなくついて行けない、体力的にも精神的にも、絶対無理。
二人がさっさと冬コミの原稿に取り掛かって、引きこもればいいのに。そんなことを半ば本気で考えていると、
「――やっぱり都ちゃんは、新谷君に必要な存在なんだね」
「へ？」
「いやね、新谷君から散々ノロケを聞かされてきたあたしとしては……彼にそこまで言わせる都ちゃんがどんな子なのか、非常に興味があったわけなのよ。ほら、彼って女性に対して恐怖心……とまではいかないにしても、ある程度距離を置いて接するでしょう？　まぁ、あたしはこんな格好だけど、バイト先の仲間は全員男だって知ってるから、彼も普通に話しかけてくれるけどね」
……ちょっと待ってください千佳さん。
「あのスイマセン……ノロケって、どういうことですか？」
初めて聞く話に、私が手を上げて質問する。
すると……千佳さんの口元が、先ほど以上に「にやり☆」と笑みを浮かべ、
「聞きたい？」
「ぜひとも」

「そうねぇ……最近聞いた奴で一番ヒットだったのは、あたしが「好きでしょうがないんだね、彼女に会いたくてたまらないって顔してるよ」って、冗談半分で突っ込んだのよ。そしたら彼、「まぁ、実際そうですからね」ってあっさり認めちゃってさぁ……半分本気で「じゃあ帰れよ★」って思っちゃった」

……あのバカ。

前後の会話が分からないので、あまりコメントすることも出来ないのだが……少しは「話を受け流す」ことを学習してほしい今日この頃。

まぁ、彼のその正直さも魅力の一つで……って違う！　騙されるな、騙されるな私！！

案の定赤面した私を、「ねー、すんごいノロケでしょー？」と、調子を取り戻した千佳さんが続ける。

「でもね、正直……羨ましいって思うよ？　昨日も彼から都ちゃんとルームシェアしたいんだって相談されたけど、正直、あたしは事情が事情だから……二人の参考にはならないんだよね」

「聞いてもいいですか？　千佳さんは、その……この間隣にいた、物静かな方と一緒に暮らしてるんですよね？」

私が思い切って問いかけると、彼女は苦笑しながら頷いて、

「あたしは今、その物静かな女――真雪と一緒に暮らしてるんだけど……コレだって、あたしが親と絶縁状態で、真雪の親御さんがあたしを完全に理解してくれているから成立してるだけなんだよね」

そして、少しずつ話してくれた。

千佳さんと真雪さん、この二人の奇妙な関係と……壮絶とも思えるような、過去を。

話が長くなるので少し要約すると、

「性同一性障害って……都ちゃんも、言葉くらいなら聞いたことがあると思う」

昔から、千佳さんは自分が「男」であることに違和感を感じてい

たらしい。
一時期ドラマでも取り扱われて話題になった言葉なので、私も何となくではあるが、知っているつもりだ。
それは、自分が「男」であることを認められず、「女」になろうとしてしまう。なれない自分に違和感を感じてしまう。
「あたしはね、幼稚園くらいの頃から兆候があって……小学校入学直前くらいに、一度病院に行ったの。そしたら、そこでばっさり切り捨てられちゃった。「こんなに幼い子どもが、そんなこと思うわけがない。幼児にありがちな一時的なもので、すぐに解決する」って、ね」
発症に年齢は関係ない。診断した医師の思い込みのせいで、千佳さんはそれから……非常に多感な時期を、実に複雑な感情のまま過ごさなければならなくなってしまった。
「中学生のときに、あたしは自分を受け入れられなくなった。変わっていく自分を否定したくて、家に引きこもったの。高校は通信制の学校に進んだけど……あたしの親、社会的に少し立場のある人間でね、「長男」であるあたしがこんな状態であることに耐えられなかったみたい」
過去一度の誤診を信じ込み、千佳さんは「一時的な気の迷い」だと思い込まれていた。
適切な治療やカウンセリングを受けさせてもらうことも出来ず、段々、世界から孤立していく。
「その頃だね、親への反発でこんな格好始めたら……もう即効で勘当されちゃったわよ。それからしばらく理解のある学校の先生の家にお世話になってたんだけど……それが真雪のお父さんだったってわけ。真雪と知り合ったのはその頃」
事情を知った真雪さんの親御さんが、千佳さんを受け入れてくれて。
真雪さんもまた、千佳さんを認めてくれた。
「今はこうして、フリーターしながら専門学校目指してるの。美容

師になりたくてね、そのための授業料と……自分に向き合うための投資、何とかしなくちゃならないから」
世の中はお金がかかる、と、空を見上げてため息混じりの千佳さん。
そして、
「……あたしにとっての真雪が、新谷君にとっての都ちゃんなんだろうな、って、そう……思ったんだ」
それは、私にとっても嬉しい言葉だった。
私の存在が、どこまで薫に必要なのか……自分ではよく分からないから。
「まぁ、あたしの場合……今はそこまで深刻じゃなくてね。コレでも前より大分「男らしく」なってるのよ？」
……本当だろうか。思わず疑ってしまうのはしょうがないことだと思う。
私の視線に気が付いた千佳さんは、「本当だってば」とやっぱり綺麗な顔で笑顔を向けて、
「今日話してみて、改めて確信したよ。この娘さんは実に素晴らしい人徳の持ち主だって」
いや、単に周囲が「普通じゃない」だけです……慣れなんです、認めたくないけど。
さすがに真実を言い出せず苦笑するしかない私を、千佳さんが不意にじぃっと見つめ、
「……うん」
頷く千佳さん。
「な、何ですか？」
「都ちゃん、君はまだ、自分の魅力を生かしきれていないっ！！」
唐突に力説する彼女は、状況が飲み込めなくて呆けている私の手を……いきなり掴んで強引に立ち上がらせると、
「都ちゃん、本日の予定は？」
「え？　えぇっと……これから授業で、その後はバイトです……」

「うーん残念。じゃあ、次にバイトがないのはいつ？」
「あ、明後日ですけど……？」
条件反射で正直に告げると、「明後日、明後日ね！」と、目をダイヤモンドよりも輝かせた千佳さんが、立ち上がってきょとんとしている私にウインク一つ。
そして、
「都ちゃん……女らしくなりたいかっ！？」
「は、はい？」
「よし、いい返事だ。じゃあ明後日のこの時間、この場所に集合！遅刻したらお仕置きだからねっ！！」
「はいぃ！？」
展開についていけない。目を白黒させる私を、千佳さんは「びしいっ！」という効果音が欲しいくらい、思いっきり指差して、
「今の都ちゃんは……圧倒的に色気が足りないのだっ！」
「ぐはぅっ！？」
直球ど真ん中ストレート……その通りでございますおねにーさま……。
「いい？　都ちゃんも素材は整ってるんだから。胸にシリコンも生理食塩水も入れなくてその大きさなんて、新谷君も幸せよねー」
……最近、自分の胸が何度もネタにされている気がするんですけど……そ、そこまで大きくないつもりだったのに。
釈然としない、というより圧倒されている私の肩を千佳さんは容赦なくバシバシ叩いて、満面の笑みで声高らかに宣言するのだった。
「私と真雪に任せなさい！　都ちゃんはあたしのせいで不安にさせちゃった罪滅ぼしもかねて……女の色気、伝授してあげるわっ！！」

性別は「藤原千佳」（後書き）

千佳さんのバックグラウンドについて、割とあっさり流しましたが……千佳さんの壮絶な過去を追いかける物語ではないので、ご了承ください。

その代わりに、都が弄ばれる（言葉通りの意味）様子をお楽しみください！

沢城都改造計画

かくして。
沢城都は、男性であるはずの千佳さんから「女らしさ」を伝授されることとなったのであった。
……それでいいのか？

「おーい、都ちゃーんっ！」
運命の日、私が集合場所へ5分前行動で行ってみると……既に準備完了の千佳さんが大きな声で手を振ってくれる。
そして、
「……千佳、騒がしいわよ」
元気な千佳さんをジト目で見つめるのが、こうやって会うのは初めての真雪さん。
駆け寄る私の全身を、千佳さんがじぃっと観察するように眺め、
「まぁいっか、どうぜ全身コーディネートだし」
本日の私の格好は……えぇっと、普段着のパーカーとジーンズなんですけど。
ちなみに千佳さんと真雪さんは、それぞれ対照的な美人さん。千佳さんは黒いベロアのジャケットに白いブラウス、足元はスキニージーンズに濃いブラウンのハーフブーツでキメ。対する真雪さんは濃い緑のバルーンスカートのワンピースに白のウェスタンブーツ。羽織っているボーダーのカーディガンも可愛い。
……っていうか私、場違いな気がしてるんですけど。
私を見つめて「うむうむ」と考える千佳さんの横から、真雪さんが私を見つめて、
「えっと……都さん、ゴメンなさいね、千佳に付き合わせてしまって」
落ち着きのある、それでいて透き通った声で話しかけられ……思

わず赤面しそうになる。
い、いるんだ……天然でこんな声の人。直感的に大原さやかさんみたいな感じだと思った。分かる人だけ脳内でうなづいてくれればそれでいい。
「初めまして、ってわけでもありませんけど……沢城都です」
私が慌てて自己紹介すると、真雪さんもまた、その表情に綺麗な笑顔を上乗せして、
「上田真雪です。今日はよろしくね、都さん」
……ヤバイ、このお姉さん私のストライクゾーンど真ん中だ。
理想のお姉さん像そのものである真雪さんに話しかけられ、私の脳内がざわめき始める。
私が真雪さんに色々な妄想をしていることなど、多分、当人を含む目の前のお姉様方は知るよしもなく（いえ、むしろ知らないでいてください……）、
「よし、自己紹介もすんだみたいだし……早速出かけますかっ」
千佳さんを先頭に、繁華街へと繰り出したのだった。

大学生が買い物をするメインスポットは、大学からバスで数十分のところにある駅ビルや周辺の百貨店、セレクトショップが中心だ。
……まぁ、私の場合もそうなんだけど、特に決まった店で買うとか特定のブランドが好きとか、そういうわけではない。あえて好きなブランドを上げるとすれば……ユニクロ？　うん、安いしシンプルで大好きだよ？
駅近くのショッピングビルにユニクロが入っているから、そこでトップスから下着までまとめて買って終了。いっつもそんな私なので、
「……あの、千佳さん……ココですか？」
駅から少し離れた商店街の一角、個人経営のランジェリーショップ……。
ショーウィンドウの向こうには、各メーカーが趣向を凝らした今

年最新モデルの下着がずらり。閉ざされた扉を開けは、その先はまさに男子禁制のパラダイス？（いや、今から思い切り突撃するけど）普段なら絶対素通りする店の前につれてこられ、思わず足元がすくんだ。

「この店はね、あたしの知り合いが経営してる店なの。値段もお手ごろだし、品も確かなんだから」

店の前、笑顔で紹介してくれる千佳さん……。でも、いきなりココですか。

「都ちゃん……聞くけど、一番最後にバストサイズ測ったのはいつ？」

「え？　えぇっと……いつだろ。高校卒業したくらいだから……」

「うっわ半年以上前？　っていうかその頃からその大きさなの？」

何か悪いんですか。

感心するように見つめる千佳さんの頭を、横から真雪さんがべしっと叩いて、

「千佳、みっともないわよ。都さんが困ってるでしょう？」

「でも真雪、コレは測定しがいがありそうよー。要するに、新谷君と付き合い始めてから初めてってことだもんね」

「ハイハイ分かったから。とりあえず、雑談は中に入ってからね」

別の意味で興奮し始めた千佳さんの首根っこを掴み、そのまま中へ入っていく千佳さん。

立ち往生しているわけにもいかず、私も慌てて二人に続いたのだった。

「あら、千佳ちゃんに真雪ちゃん。お客さん連れてきてくれたのね★」

きらびやかな店内、色々眩しい店内……思わず目をそむけたくなるのは、普段私があまりに無頓着だからでしょうか。

今のところお客さんは私たち3人だけ。そんな私達の気配に気が付き、店の奥から出てきた女性がスマイルでお出迎え。

外見年齢は２５，６歳くらいだろうか。一つにゆるく結った長い髪の毛、ふっくらした女性らしい体系に薄水色のワンピースがよく似合う。北都南さんばりのアダルトな声に（分かる人だけ分かってくれればいいです）、柔和な風貌。真雪さんとは違う、おっとり天然お姉さんタイプだ。これはこれで大好物の属性。思わずじっくり観察したくなる……。

と、千佳さんが後ろにいる私を強引に前へ引っ張り出し、

「早苗さん、早速だけど……彼女の、都ちゃんに合うサイズでお手軽価格、なおかつ彼氏を悩殺する勝負下着、お願いしますっ！」

「へ！？　あの、ちょっ……！」

色々言いたいことはあるのだが……彼氏悩殺の勝負下着って何ですか！？　しかも結構注文多いですよね！？

思わず言葉を失って固まる私を、おそらく店主の早苗さんが「そうねぇ……」と見つめ、

「都さん、今、サイズは何をつけてらっしゃるの？」

「え、えっと……確か、７５のＤだったような……」

……うろ覚えでゴメンなさい。

ちなみに、胸のサイズはトップとアンダーの差で決まるんだけど……まぁ、こんなことまで説明しなくてもいいでしょう、多分。

あははと誤魔化すように笑う私に、早苗さんはカウンターにおいてあるメジャーを手に取ると、

「じゃあ、ちょっと……奥で測ってみましょうか。真雪ちゃん、千佳ちゃんが覗かないように見張っててね」

「分かりました」

当たり前に返答した真雪さんは、既に店内をウロウロしている千佳さんへ近づいていく。

「じゃあ、奥の試着室へどうぞ」

私は早苗さんに導かれ、カーテンの向こう側へ。

そして。

「……嘘でしょう……」
私が乾いた声で呟き、
「ほらね！　やっぱりあたしの言ったとおりだった！」
千佳さんが「どーだ」と言わんばかりに胸を張り、
「おめでとう、と、言うべきなのかしら……」
真雪さんが頑張って言葉を選び、
「結果から言うと、都さんは７５のＥが丁度いいと思うの」
メジャー片手ににっこり微笑む早苗さんの言葉が、今回の測定結果そのものである。
お、おかしい……そんな、どうして？　頭の中で色々考えても答えが見つかるわけのない問題。
胸が大きくて何が嫌なんだ、と、思われるかもしれない。ただ……私は巨乳を愛でるのは好きだが、自分がそうなりたいとは思わなかった。ただでさえ長時間のパソコン使用で肩こりなのに、それがひどくなるかもしれない。それに……まぁ、周囲の目とか、色々気を遣わなくちゃならなくなるし……。
……今後、絶対ネタにされるし。
「えぇっと……確か、彼氏悩殺の勝負下着を探しているのよね？」
「えぇ！？　いや、普通のＴシャツブラとかでいいんですけど……」
店内をふらりと見渡して考え込む早苗さんに、慌てて訂正を入れる私。
だが、
「何言ってるのよ都ちゃん！　新谷君には既にあたしから電話連絡しておいたから、彼の期待に応えてあげないとっ！！」
何ですと！？
思わず持っていたトートバックを取り落としそうになる。すっかりハイテンションな千佳さんの横にいる真雪さんが、申し訳なさそうな目で訴えていた。
「ゴメンなさい、止められなかった」……と。

「あのあのあの、千佳さん……薫に、何を伝えたんですか？」
「うふふ、都ちゃんがすっごい「せくすぃー」になって新谷君においしく食べられる準備中だから、君はいろいろ想像しながら、取り皿とナイフを持って待ってればいいよ、ってね」
何ですかそれは。
っていうか……普通に取り皿とナイフ持って待ってそうなんですけど、私の彼。
逃げられないことは分かっているつもりだった、だけど遂に、絶対に逃げられないことを悟るしかなかった。
私は一度だけ、深く息をつくと……顔を真っ直ぐ上げて、
「こーなったら……薫を一発で悩殺して気絶させてやりますっ！！」
昇天、とまではさすがに言えませんが……えぇい、自分の属性を思い出せ。私は攻めだ、攻めの都のはずだっ！！
自分によく分からない暗示をかけて気分を盛り上げる私に、千佳さんは指をパチンと鳴らしてウィンク一つ。
「よっしゃ！　そうと決まれば……早苗さん、あたしはやっぱり「アレ」しかないと思う！！」
「ふふ、「アレ」ね」
二人の間で共通認識の「アレ」が何なのか、私には勿論分からないのだけど……。
ちらりと真雪さんに視線を移すと、目を伏せてうつむいていた。
……えぇと、どういうことですか？

案の定、
「ちょっ……！　ちょっと待ってください千佳さん早苗さん！　そ、それは無理です絶対無理です！！」
「じゃあ、コッチならまだ大丈夫でしょ？」
「いや、布の部分が明らかに少なすぎるし……」
「都さん、コレが今年のトレンドよ★」
「あのスイマセン……私まだ、そんなに大人じゃないんですけど…

…」
「都ちゃん、いっそコレなんかどうだ！？」
「せめて下着としての意味をなすモノを持ってきてくださいっ！！」
……真雪さんが目を伏せた理由を、その身で痛感する私なのである。

両者の激しい攻防から数十分後、
「結構普通じゃない？　それ」
「私にしてみれば大冒険です！！」
互いに色々妥協した結果、私は新しいサイズの下着（上下セット）とキャミソール（ってことにしよう）を購入、これで総額３８００円は大分安い。
「折角だし……もうセットしておく？　新谷君がすぐ堪能できるように★」
「……いいえ結構です謹んで遠慮させていただきます」
おつりを財布に片付けながら、後ろから興味津々に囁く千佳さんの申し出を丁重に辞退。
「千佳、いい加減にしなさい」
さすがに呆れた真雪さんが諌めるも、「だって、楽しんだもん」と実に彼女らしい言葉を返される。
「よし、次は服装ね！　都ちゃん、真雪、行くわよっ！！」
相変わらずパワフルな彼女を、早苗さんは終始、笑顔で見つめていた。
既に意識が次の店へ向かっているため、その姿は店の外、切り替えの早い千佳さんを追うべく、私も早苗さんに会釈して、
「――都さん」
「はい？」
不意に早苗さんから呼び止められた私は、
「今度は是非、噂の彼氏さんと一緒に来てくださいね」
「……考えておきます」

とりあえず、引きつりながら笑ってみた。

さぁ、まだまだ買い物は始まったばかり。次の店へレッツゴー！！

……と、一人だけ元気なのは先頭を歩く千佳さん。その数歩後ろから、既に色々流されかけている私と、そんな私を気遣う真雪さんが続く。

一同は商店街から再び駅前へ戻ってきた。どのデパートへ入ろうか、案内板の前で立ち止まって最短ルートを頭の中で思い描く千佳さんに、ようやく休憩できると心の中で安堵したのも、つかの間。

「あれ、都……？」

不意に横から声をかけられ、誰だと思って顔を向けてみれば。

「綾美、大樹君」

昼間から二人でお出かけという珍しい場面に遭遇し、少し間の抜けた声で名前を呼んでしまった。

ロングカーディガンにスキニーデニムの綾美と、デザインTシャツに濃紺ジーンズの大樹君。どこからどう見ても均整の取れたカップルである二人は、私の横にいる真雪さんに気が付き、

「都ちゃん、薫は？」

「え？　あ……今日は薫と一緒じゃないの。大学の先輩と一緒で……」

ちらりと視線を向けると、軽く会釈する真雪さん。

二人は少し意外そうな顔で私達二人を見つめ、

「へぇー……綺麗な先輩ねぇ。都、いかにもアンタが好きそうなタイプの……」

「あーやーみっ！！」

さすが親友、私の嗜好から余計なことまで口走ろうとした親友を大声と殺気を込めた目線で制し、

「ふ、二人はデート？　こんな場所で会うなんて、奇遇ねー……」

「そうなのよ、丁度トーンとインクが切れちゃって……夏コミの委託販売をあさるついでに、町へ繰り出してきたって訳」

お願いだからそんな専門用語並べないで！！
何の躊躇いもなく饒舌に語る綾美を、隣にいる大樹君は止めるどころか、
「そういえば都ちゃん、今更だけど「Ｓｃｈｏｏｌ　Ｄａｙｓ」やる？　まぁ、正直欝展開多いし、薫のマシンでギリギリ大丈夫だろうってくらい容量食うけど、「Ｓｕｍｍｅｒ　Ｄａｙｓ」も一緒に貸せるから、薫に欲しいソフトを伝えてくれよ。あ、全編アニメつながりなら「フルアニ」もあるけど、微妙だったんだよなぁ……都ちゃん、脱衣マージャンは……」
「うん分かったわざわざご丁寧にありがとうっ！！」
わざとだ、絶対この二人わざとだっ！！　もう少し状況とか環境とか選んで言葉を発しようよ二人とも！
この二人には、千佳さんと真雪さんには私と薫の「本性」を隠すことに決めている。背中に嫌な冷や汗がにじむ私と、会話の内容がちんぷんかんぷんの真雪さん。
悪魔のような二人は、その後も私で限界まで遊んだ後、
「じゃあね。新谷君にもよろしく」
「都ちゃん、またな」
至極爽やかな笑顔で、ア〇メイトが入っている駅ビルの方へ歩いていく……。
……疲れた。
「随分にぎやかなお友達なのね」
すっかり蚊帳の外だった真雪さんが、疲れた表情の私を覗き込み、
「途中、会話がよく分からなかったんだけど……あの二人は、どういう知り合いなの？」
「……人畜有害なカップルです……」
これ以外に、的確な表現方法が思い浮かばなかった。

沢城都改造計画（後書き）

千佳さんの独壇場です……実はまだまだ続きます。都、頑張れ。
あと、大樹の出番が少なくてスイマセン……ここだけです。

予想外×急展開！

「……何者ですかあの人は」

ぐったりと息をつきながら椅子に倒れこむ私を、真雪さんが苦笑で見つめる。

ここは、駅ビル内のファーストフード店。あれから更に買い物を進める千佳さんのパワフルさについていけず……こうして早々にダウンしている私なのである。

4人掛けのテーブル、放課後なので制服姿の高校生が目立つ店内。女子高生の生足を目で追いながら、ちらりと、横の椅子に置いた紙袋も見つめてみる。

そう、私の横には大きな紙袋が二つほどある。コレは勿論、千佳さんに「沢城都、女性化計画」（自分で言ってて悲しくなる言葉だわ）の一環として猛烈にプッシュされた結果購入することになった、「普段の私では絶対に買わないような洋服たち」である。

あぁ、バイト代……コレ、一着でコミック何冊分だろう、そう計算してしまう自分がセコイ。

それにしても、こんな場所で綾美と大樹君に会うとは思っていなかった。二人が一緒に行動するのは日曜日か夕方以降だと勝手に思っていたので、平日の昼下がりに歩いている二人には、妙な違和感を感じるというか。

……まぁ、あの場に千佳さんがいなかったのが不幸中の幸いだろう。あの3人は同じ空間に存在させちゃいけない気がする。でないと私、きっと、もたない。

ちなみに今、ココにいるのは私と真雪さんだけ。千佳さんは「チェックしておきたい店がある」と言い残し、疾風のような速さで消えてしまった。

その間、私達は休憩タイム。真雪さんもまた、千佳さんの買い物に巻き込まれて……可愛い黒のスカートを買っていた。

「都さん、千佳は強引だから、嫌なときははっきり言っていいのよ？」
ブラックコーヒーをすすりながら、真雪さんが申し訳なさそうに提案してくれる。
だけど、私はコーラをすすってから首を横に振り、
「私が女らしくないのは……事実ですから。薫からも言われてるんですよ、俺がスカート買ってやるからって。男性ってどうしてスカートが好きなんでしょうね？」
そう、今まで何度言われただろう……実現してないけど。
私が彼の名前を出すと、真雪さんはとたんに苦い表情になって、
「さっきは……本当にゴメンなさい。千佳を止めたんだけど、一旦決めたら他人の忠告なんか聞かないから……」
「え？　あ、あぁ……気にしないでください。多分、結果は同じですから……」
おそらくさっきの電話のことだろう。私が慌ててフォローすると、
「都さんは本当に……愛されてるのね」
目を細めて呟く真雪さん。その綺麗な表情に一瞬見とれてしまった自分は正常だと信じている。
店内は若者の雑音に満ち溢れていた。この場所なら、多少の話はかき消されるだろう。そう思った私は、一度、呼吸を整えて、
「あの……真雪さんは、千佳さんと一緒に住んでるんですよね？」
私の直球な質問にも動じることなく、穏やかに頷く真雪さん。
「千佳から、ある程度の話は聞いていると思うわ。私の親は、二人とも教師なんだけど……ある日、父さんが連れてきたのが千佳だった。千佳はその時、生家とは絶縁状態で……身寄りがなかった。私は、そんな千佳に自分を重ねたの」
「自分を、重ねた？」
「親が教師なんて職業だとね……どうしても、周囲から妙なレッテルつきの視線で見られている気がするのよ。勿論、私は両親を尊敬しているわ。だけど、それとコレとは別問題。私は「上田真雪」じ

ゃなくて「上田先生の娘さん」としてしか見られてないんだって、ひねくれた考え方しか出来なかったから」

それは、周囲の言葉が重くてたまらない幼少時代。

両親という模範を知っている人間が浴びせる悪意のない言葉が、彼女の世界を狭めていく。

何か、両親の名に見合うだけの実績を残さなければならない、そんな無言のプレッシャー。仮に周囲が「そんな気はない」と言っても、それはもう、彼女に届かない。

そんな悩みを親に相談できるはずもなく、世界は、狭くなっていく。

「けれど、千佳は、最初から私を「上田真雪」として見てくれた。まぁ、最初は互いにギクシャクしてたけど……千佳、周囲を巻き込む力があるでしょう？　私も「彼女」に巻き込まれて……ようやく、世界が開け始めたの」

私の父親はサラリーマンだし、母もパート勤めだから……上田先輩が経験してきた思いを、完全に理解することは出来ない。

ただ、感覚として分かるのは……最近、私の近くにも、そんな人が出現したから。

外見で判断されてしまう、自分の内面を偽りながら世界と接してきた、そんな彼を、よく、知っているから。

「……薫も、そうなんです。彼、無駄に顔と性格が整ってるから……優しすぎるから、周囲の高い理想に合わせようと頑張って、自分のことは顧みずに他人ばっかり気にして、自分のせいで他人を傷つけるくらいなら平気で自分にナイフを突き立てる、そんな人、なんです……」

そう、なんて不器用な人なんだろう。

真っ直ぐ進むことしか知らない彼だから、私は、目を離すことが出来ない。

これ以上、彼を傷つけたくないから。

薫は今まできっと、いろんなことに耐えてきたはずだ。だから、

私と一緒にいる間は何も我慢しなくていい、何も偽らなくていい、そんな関係にしたいと……私は、思っているから。
頭の中に彼の顔が浮かんだ。早く会いたい、そう思ってしまう。
そんな私の心情を察したのか、おもむろに真雪先輩が立ち上がり、
「私も、千佳から間接的にしか聞いたことがないんだけど……今から会わせてもらいたいな、新谷君に」
そう言って、荷物を持った。

「で、でも……いいんですか？　千佳さんを置いてきちゃって……」
「大丈夫よ。子どもじゃないんだから」
あの後、真雪さんに連れられて私は大学付近まで戻ってきた。当然、合流できなかった千佳さんは放置プレイ。真雪さんがメールを送っていたが、どんな返信が戻ってきたのかは分からない。
二人で荷物を抱え、毎度おなじみ、大学から一番近いコンビニの前で、
「じゃあ、私も荷物を置いてくるから」
「そういえば、真雪さんはどこに住んでるんですか？」
素朴な疑問に首をかしげると、彼女は笑顔で国道の向こう、学生というよりも家族向けのマンションを指差して、
「あそこ、家族向けのマンションなんだけど……家賃を2で割っても3万円なの。ルームシェアしてる学生も結構多いみたいよ」
安いな。やっぱりルームシェアって条件が当てはまれば効率的だと、私も薫と何とかならないかと、本気で思ってしまう。
「でも……真雪さん、やっぱり着替えてこなくちゃダメですか？」
「折角の機会だもの。それに、新谷君を喜ばせたくて色々買ってきたんでしょう？　だったら、その目的は達成しないと」
笑顔で諭され、しぶしぶ頷くしかない従順な私。
そんな私の姿を見た真雪さんは、「大丈夫。試着したときはすっごく似合ってたじゃない？」と、やっぱり笑顔で勇気をくれて、
「じゃあ、またココで会いましょう」

私達は、一旦それぞれの家へ戻ったのである。

私の家――要するに寮へ戻ってきた私は、とりあえず持っていた荷物を床に置き、ベッドの上に座って息をつく。

床に置いた紙袋、その中には色々と入っているのだが……うぅ、コレを着て今から外に出るのか。今まで積極的に着てこなかった服装たちには、やっぱり少し抵抗がある。

いや、別にゴスロリとかじゃないんだけど……でも……。

「――都ちゃーん、奈々ですけどー？」

と、ノックと同時に毎度おなじみの声が廊下から響く。私が「どーぞ」と返答すると、「はーい、毎度おなじみ、奈々の洗濯デリバリーだよー」と、私の洗濯物一式をたたんで持ってきてくれた幼馴染系の彼女が笑顔をのぞかせた。

ちなみにこの寮内、洗濯は備え付けのコインランドリーである。私は今まである程度まとまってから洗濯していたのだが、奈々と割り勘するようになってから、今日のように洗濯から乾燥まで、全てを彼女に任せてしまっているのが現状である。

……情けないけど。

「毎回毎回、ありがとね」

「ううん、奈々も好きでやってるから……あれ、都ちゃん、買い物行ってたんだね。しかも珍しく、ユニクロの袋じゃない……」

私の服の好みまで把握している彼女が、軽く目を見開いて、

「ね、ね、見てもいい？」

「へ？　別にいいけど……」

すっかり好奇心の塊になった奈々が、とりあえず自分の近くにあった紙袋を手に取った。

「なっにが出るかなー？　なっにが……あぁっ！？　み、都ちゃんがスカート買ってるーっ！？」

まさにお約束の反応。袋の中からそれを引っ張り出し、ベッドの上に広げる。

そして自身もベッドの淵に座り、それを目線の高さまで持ち上げた。
「しかも可愛いし！　これ、絶対都ちゃんのセンスじゃないよね！？」
「……悪かったわね、その通りよ」
「やっぱりー。しかも安い！　この手のスカートだと、バーゲンでも５０００円はすると思うよー？」
戦利品一品目は、マジョリカプリーツ……っていうんだって、普通のプリーツよりも細かくて、ふわっと揺れると可愛いんだけど……のミディアム丈シフォンスカート、色は白だが、透けないようにレースのあしらわれたペチコート付き。重ねて着るとスカートとして、外側だけならジーンズと合わせても可愛い一品である。
……勿論、これから「スカート」として着用しなくちゃならないんだけど……。
ちなみに、値札に書かれた値段は２５００円。
「駅の近くにアウトレット専門のお店があって、そこで買ったよ」
「いいなぁ……今度は奈々も連れて行ってねー」
中から一緒に買ったボーダーのカットソーも取り出し、私の予想外の戦利品を羨ましそうに見つめる彼女だが、
「じゃあ、コッチは何だろ……って、えぇっ！！　奈々、今日はもう驚かないって思ったけど、コレはちょっとびっくりだよ！？」
もう一つの紙袋には、靴下３足（１０００円）と、１９８０円のエナメルパンプス（色は緑）と……最初にゲットした、アレだ。
「み、都ちゃん……そりゃあ、都ちゃんは彼氏もいるし胸も大きいから、下着は重要だと思うけど……でも……うぅ、都ちゃんが急に大人になったみたいで、奈々は寂しいっす」
それらを丁寧に袋へ片付けながら、奈々の大きな瞳が、上目遣いで私を見つめた。
……その可愛さ、反則だから。
「そ、そんな大げさな……」

よよよ、と、わざとらしく目を伏せながら悲しく呟く彼女に突っ込んで、
「奈々は……その……コレ、どう思う？」
「どうって？」
「あ、いや、だから……こんな下着だったら、薫、喜んでくれるかな、とか……」
羞恥プレイ覚悟で尋ねる私に、彼女は「そりゃあ勿論！」と拳を握りしめ、
「都ちゃん、軽く3日は拘束されるかもね」
「え。」
「だぁって……いきなり女の子を意識した都ちゃんを見たら、新谷君だって嬉しいはずだよ。でも、他の男の人に見られたくないって思って、外に出られなくなるかも」
奈々が言うには、「コレが少女漫画に出てくる、王道なヒーローの心境なんだよ」と、人差し指をぴっと立てて、
「でも……奈々は嬉しいな。都ちゃん、すっごく可愛いんだもん」
「そうかな……私には、奈々の方が可愛く見えるけど」
「ううん、都ちゃん、恋する乙女って感じで萌え萌えだよぉ。奈々は、そんな都ちゃんを見ているのが楽しいのだっ」
萌えという言葉を私に対して使うべきなのか悩むところだが、奈々が喜んでいるならそれでいいことにする。
先ほどのスカートを相変わらずじぃっと眺めている彼女は、不意に、何かを思いついて顔を上げ、
「もしかしてコレ、新谷君に買ってもらった？」
「ううん、全部自分で買ったけど……」
「じゃあ、今から新谷君に会いに行くんだねっ！！」
途端、彼女の目が発光ダイオードよりも輝いた。
「ってことは、都ちゃんは今日もお泊りかぁ……あ、勿論この下着は持っていくんだよね？　都ちゃんはズボンに慣れちゃってるから、いくら新谷君の前でも足を広げたりしちゃダメだよ？」

まるでお母さんのように、あれやこれやと考えてくれる奈々。
私が圧倒されながら頷いていると、彼女は不意に顔を近づけて、
「……奈々が使ってるグロス、使う？」
ポケットからリップグロスを取り出し、手渡してくれる。
ラメの入ったピンクのグロスは、やっぱり普段、私が買わないような一品なのだが、
「これで更に魅力増大で、新谷君をメロメロにしちゃおう！」
笑顔でガッツポーズを作る奈々につられて、私も笑顔になる。
私の周囲には相変わらず、頼もしい友人しかいないのであった。

……慣れない。
スカートをはいて外を歩く、という経験は高校生以来であるような気もして……ミニスカートをはいているわけでもないのに、違和感ばかり感じてしまう。
っていうか、足元パンプスとかいつブリだろう……高校時代もスニーカーで自転車をこいでいたので、こんな浅い靴を履いたのは本当に久しぶり。いつか慣れるかな、想像できない自分の姿に歩きながら苦笑してしまう。
色々と荷物の入ったトートバッグを持ち直し、靴が脱げないようにと意識しながら歩みを進める私。
とりあえず、私は再びコンビニに向かっていた。そこで真雪先輩と合流して、薫を呼び出して――という打ち合わせ。真雪先輩は薫に会ってどうするつもりなのだろう……クールかつ真意の読めないビューティーな方なので（意味不明……）、千佳さんじゃないんだから大丈夫、と、よく分からない言葉で自分を納得させようとする私なのである。
寮とコンビニは一本道である。だからこのまま直進すれば――
「ちょっと……いい加減にしてください……！」
消え入りそうな声が聞こえてきたのは、丁度その時。

私は思わず立ち止まり、改めて、耳を澄ませる。

「手……離して、離してくださいっ……！」

何だろうこのシチュエーションは。まるで女の子が無理やり連れて行かれそうになっているようだ。

空耳でないことを祈りながら、注意深く、周囲を見渡す。

大学が講義の時間なので、周辺に学生の姿はない。自転車で通り抜ける人はいるけど、彼女の声に気が付いているのは私だけみたいだ。

もう一度、眼鏡の奥にある視力が限りなくゼロに近い瞳で注視する。少し先に、学生用のマンションへ続く細い脇道があるけど……でも、まさか。

その分岐点まで近づき、問題の道へ足を踏み入れる。この路地は国道と繋がっていて、コンビニを頂点にした三角形の底辺みたいな位置にあるのだが。

人の通りはない。聞き間違いだと思った次の瞬間、

「林檎ちゃん？」

私は発見してしまったのだ。

学生用マンションの非常口で見知らぬ男性と押し問答になっている……彼女の姿を。

私の声に気が付いた両名が、思いっきり私を見つめる。

手前に入るのが林檎ちゃんだ。今日も相変わらず美少女。やっぱりスカートはこういう可愛い子が着るから可愛いのだと妙に納得してしまう相変わらずの私。

そして、彼女の向こう側、見知らぬ男性が一人。

背丈は小柄な彼女よりも高いが……せいぜい私と変わらないくらいだろうか。中肉中背、服装はポロシャツで（下まで見えない……）

前髪が目をすっぽり覆い隠すほど長く、イマドキそんなエロゲーの主人公いないよと突っ込みたくなってしまう。
私は少し表情を引き締めながら、二人に近づいた。
「そんなところで、何してるの？」
口ではそんなこと聞いているが、怯えきった彼女の表情を見れば、事情などすぐに察知してしまう。
彼を睨みながら距離を詰める私。武器の類を持っている可能性は否定出来ない。ナイフなんか取り出されたら厄介だ。何をするのか分からない、そんな雰囲気を感じる人だから。
大きな声を出そうか、それとも警察を呼ぼうか、私が本気で思案した、次の瞬間、
「そ、そうよ……彼女なら漫画とかゲームとか好きだしっ！　す、スタイルだっていいから私なんかよりずっと適役だと思うんだけどっ！」
多少上ずりながらも大声でそういう林檎ちゃんは、隙を突いてその場を離れると、唐突に私の背後へ回りこみ――
「うどわっ！？」
いきなり背中を押されて、ただでさえ気をつけていた足元が脅かされる。
そのまま体は前のめり。咄嗟に地面への転倒こそ回避できたものの、気が付けば位置関係が大きく逆転していて。
私の目の前に、外見がギャルゲー主人公な人物がいて。
私の背中にいたはずの林檎ちゃんは……猛ダッシュでその場から逃げ去っていたりして。
状況を理解で生きない私の手を、目の前の人物が思いっきり掴ん

で、
「……まぁ、素材としては問題ないかな」
ぽつりと呟くと、半ば放心状態である私の手を強引に引いて、見知らぬマンションの中へ引っ張っていく。
……私、これからどうなるの？

予想外×急展開！（後書き）

唐突な急展開ですが……さて、さらわれた都はどうなってしまうのか！？

１８禁ではございませんので、そーゆー展開を期待した人は正座です！

「白は素人です！」ＢＶ都

混乱したままの私は、結局そのマンションの２階角部屋まで引っ張られた。

何？

何が起こっているの？

彼が部屋の扉を開き、そのまま中へ連れ込まれる沢城都。靴が脱げる。っていうか足からぬける。大学生向けのワンルームは、薫の部屋の構造と多少違うものの……玄関を入って右側にキッチン、左側にバス・トイレがあり、居住スペースとなっている部屋は閉ざされているすりガラス戸の向こう側。

……ちょっと、待て。

後ろで彼が扉の鍵を閉めた音を聞いた瞬間――私はようやく「現実」を理解する。

今まで散々ゲームをプレイしてきたじゃないか。こうやって見知らぬ部屋に連れ込まれたヒロインはどーなった？

扉の向こう、部屋の中にはうじゃうじゃと男がいて、ヒロインはそのまま、順番に――！？

「冗談じゃないわよ！！」

よーやく大声を上げるまで自分を取り戻せた私は、部屋から出る障害になっている彼を、強引に押しのけようとした。

このまま好きに弄ばれるなんて冗談じゃない！　パニックになりそうな自分を必死で保ち、部屋から出ようと全身でもがく。

ただ、私が強引に彼の横をすり抜けようとした瞬間……不意に右肩をぐっと掴まれ、中へ引き戻される。

「っ！？」

「……逃がさないよ」

そのまま私の行く手を阻み、表情の見えない低い声でぼそりと呟く。一瞬背中が震えた。あまり刺激しないほうがいいような気がする。彼が何者で、何を考えているのか分からないけど……この部屋は私にとってアウェー。仕掛けられたら勝てない公算が高い。

完全に萎縮した私を、彼はそのまま部屋の奥へ促す。

とりあえず背を向け、素直に従ってみた。今は確実な勝機を待つ。幸い、彼以外の靴は玄関にないし、扉の向こうに人の気配もない。部屋に入った瞬間押し倒される可能性はあるが……そこまで彼にやらせれば、１００％警察へ引き渡せるのだから。

前に進むしかない私は、一度つばを飲み込んで、その部屋へ続く扉を開き――

予想外の光景に、絶句するしかなかったのである。

部屋の中にある家財道具は、この位置からだとベッドとパソコン、コートをかけるためのパイプハンガーと棚くらいだ。しかし、まずは正面にあるその棚が尋常ではない。むしろ、棚というよりガラスケースと言う方が適切だろうか……様々な美少女フィギュアが綺麗に陳列されたその光景は圧巻。私も欲しいアレとか、一度現物を見てみたかったアレとか、一体ネットオークションで数十万はするアレとか……いかん、目移りしてきた。

勿論完全塗装済みの一品ばかり。ガチャポンやワンコインサイズのミニチュアから、スカートの中まで完全再現された種類まで、あらゆる美少女フィギュアがそこに網羅されていた。

でも凄いなぁ……ヒロインだけでなくサブヒロイン、隠しヒロインまで幅広く揃っている。総額いくらなんだろう、っていうかこんなにあるんだから、1体くらい持って帰っても気が付かないんじゃ……いや、絶対気が付くだろうなぁこういう場合。毎日欠かさずチェックしてそうだし。

「あれは――！」

思わず声を上げそうになって慌てて口を閉じた。ココで私がマニアックな指摘を――あの一番上にいるアル・アジフはエセルドレーダの衣装を着ている限定仕様だ！――するのは得策でないような気がするのだ。同類であることは変わりないかもしれないけど……いや、何となく個人的に。

そして、次に注目すべきはパイプハンガー。壁側に縦２列で並んでいるのだが……びっしりと某学園の制服とか某付属校の制服とか某Ｐｉａ○ャロの制服とか……とにかくそういう「精巧なコスプレ衣装」がずらりと並んでいる。これで一件メイド喫茶開けるんじゃないかってくらい並んでいる。そして……その制服が一体何の作品で登場するのか、９割分かってしまう自分が嫌だ。

……ベッドの下に積みあがっている直方体の箱は積みゲーだ！

隙間の薄い奴は同人誌！　間違いない！！

色々と事情が垣間見えてショッキングな部屋の入り口で立ち尽くすこと数秒。彼は私を追い越してハンガーの反対側にあるベッドへ腰掛けると、

「とりあえず……最初はナースかな」

ぽつりと呟き、私を見上げる。

……あぁなるほど。

林檎ちゃんが吐き捨てた言葉の意味をよーやく理解した私は……ため息をつくしかなかったのである。

「……とりあえず自己紹介しない？　私は沢城都。貴方は？」

「俺は世界の頂点に立つ男だ」

知るかボケ。

「で、そんな「世界の頂点に立つ男」さんが、何も知らない女の子を部屋に連れ込むとはどういうことでしょうか？」

胸中でばっさり切り捨てながらも、腕組みして彼を見下ろす。睨む感じで。

私が聞きだしたのは、どうせ記憶にも残らない彼の名前ではない。

「っていうか貴方、さっきの彼女とは知り合いなの？」
「ずっと前から俺を気にしている様子だったから、声をかけて部屋に招待しようと思っただけだ。この素晴らしい衣装を着たくてたまらないと、いつもあんなに俺へ視線で訴えていたのに……あの女、バカな奴だ」
いや、それは間違いなく君の勘違いだと思うのですが。
突っ込む気力もない。いや、相手にしたくもない。こんな独りよがりな奴が私と同類だなんて……個人的に絶対認めたくないんですけど。
そんな私の胸中など知るわけもなく、彼はおもむろに立ち上がると、自身の衣装ハンガーに近づき、
「お前は……アニメやゲームが好きだと言われていたが」
「それが何か？」
「単なるオタクにこの崇高な衣装が理解できるとは思えないが……しょうがないな」
ヲイ、何がしょうがないんだよっ！！　っていうか崇高って……アンタが見つめてるのは某一年中枯れない桜がある島の物語でヒロインが着ている白いセーラー服だしっ！
本気で殴りたくなってきたが、彼はそのまま衣装を選びながら、
「……メイドで奉仕させるのも、悪くないな」
ヤバイ、このままじゃ私、名前も知らないエセ俺様キャラ野郎（仮）に、御奉仕決定！？
このまま逃げようと思った。今なら逃げられる。ただ……今後、奴の影に怯えながら生活しなければならないかと思うと、っていうか薫の部屋に通わなければならないかと思うと、それはそれで冗談じゃないのだ。
こういうのは、一度、徹底的に叩いておいたほうがいい。どこから得た教訓なのか全く分からないが、強くそう思う私なのである。
だから、私はあえて、この部屋から逃げることもなく、
「ねぇ、メイドが一人っていうのは寂しいんじゃない？」

瞬間、彼が顔を上げて私を見た。まぁ、鼻と口しかはっきり確認できないけど。
そんな彼へ、私は鞄から携帯電話を取り出し、
「私の知り合いに、すっごい美人がいるの。電話で呼んでもいい？」
にやりと、口元に笑みを浮かべる。

「――都、どうした？」
案の定、すぐに電話へ出てくれた薫は、なかなか到着しない私を待っていたのか、矢継ぎ早に質問してくる。
真雪さんに連絡出来ればベストだったのかもしれないが、私は彼女の番号を知らない。だったら、そろそろ私が部屋にやってくるはずだとそわそわしている（はずの）薫しか、頼れる相手はいないのだ。
「今、どこにいるんだ？　まだ千佳さんたちと一緒なのか？」
「あー……薫、今、暇？」
彼の名前が中性的で良かったと思いながら、私は部屋の主からの視線も気にしながら、続ける。
「あのね、今、ちょっと友達の家に来てて、薫も暇なら来ない？」
「は？　誰の家にいるって？」
「コンビニから大学の寮へ向かう道を少し折れて右手、クリーム色のマンション、2階の一番奥の部屋にいるの。非常口の鍵が壊れてて誰でも入れるから、早く来てね」
「都？　お前、何言ってるんだ？」
少しでもいい、不審に思って欲しい。
普段から私を見ていてくれてるなら――私しか見ていないのなら、この変化、気が付いて欲しい。
これ以上喋ると、助けを求めてしまいそうで。一方的に電話を切った。
「少し強引だな。不審に思われるぞ？」
彼の言葉に、私は「あんたに言われたくない」と言い返し、

「大丈夫。薫は来てくれるから」
自分に言い聞かせるように、呟いた。

さぁ、後は……出来るだけ時間を稼ぐしかない。
ただ、この狭い室内。あるのは美少女フィギュアと、積みゲーと、コスプレ衣装。
……いや、その気になればいくらでも話を広げられるけどさ……。
ベッドの上に座った私は、音沙汰のない携帯電話を見つめ、ため息をつく。
彼は色々衣装を手にとっては考え、戻し、別の衣装を手にとっては考え、同じことを繰り返していたのだが。
「……やっぱりナースだな」
手に取ったのは白いナース服。少しエナメル素材なのが特徴で、勿論マイクロミニである。
「それを私に着せて、どーするのよ」
「聞きたいのか？」
にやりと笑みを浮かべる彼に、私は本気で身の危険を感じた。
ヤバイ、やっぱりさっき逃げるべきだったんだ……こんなに部屋の奥まで入り込み、あまつさえベッドに座っている。そりゃあ、誤解されたっておかしくないよ私ってば！！
背筋に悪寒が走った。私はこれから、薫以外の男性に……。
……冗談じゃない。
正直、今は足がすくんでうまく逃げ切れる自信はない。だけど、もう少しだけ粘れば……絶対、薫は来てくれる。
私は自分の中にある恐怖心を強引に押し殺し、別のスイッチを入れることにした。
それは、
「……白のナース服、ねぇ。それで喜ぶなんて素人だわ」
挑発的な言葉に、彼の動きが止まった。
私は足を組み、肩をすくめて続ける。

「そりゃあ、白衣の天使って言うくらいだもの。ナース服＝白って思うのもしょうがないと思う。でも、この部屋にあるフィギュアを見なさいよ。白いナース服よりも圧倒的に多い色、見えてくるんじゃないの？」
私の指摘に、彼が目を見開く。
そう、私が言いたいこと、それは、
「無難にリアルな色選んでるんじゃないわよ。コスプレナースっていえばナース服はピンクって、相場で決まってるでしょう！？」
「なっ……！」
瞬間、彼は実に分かりやすく絶句した。
「ざっとみた限りでは……ピンクのナース服、ないわね」
「そ、それは……」
「リアルと同じ色を選ぶなんて、素人のやることね。いい？　コスプレは架空でいいのよ！　より「萌える」方向へ持っていったほうが勝ちなの！　そういう点では明らかにピンクのナース服のほうがいいって分かるでしょう！？　分からないなんて言わせないから！」
頼む、お願いだから分かってくれ。
ギャルゲーにおけるナース服は、ピンクの場合が結構多い。理由まではよく分からないが……私は圧倒的にピンクが好きだ。だってエロいし。
「そんな、俺のコレクションが……無難……」
きっと、彼の中にある色々なものを根元からへし折ってしまったのだろう。がくりとうなだれる彼だが、私は容赦をする気なんか全くない。
「その隣にある制服……「D・C」の付属校よね？　本校は？」
私の問いかけに、彼は答えられない。
「主人公の制服ばっかり揃えて、何か制覇したつもり？　本校までフルコンプしてからデカイ態度になりなさいよ。それに……その横にある「SHUFFLE！」は夏服だけみたいね。新作では完全に冬服がクローズアップされてるし、コ〇パでも随分前から売ってる

わよ。なのに揃えてないなんて、どういうことなのかしら」
　重箱の隅をつつくような指摘に、彼は言い返せなくなる。
「その横にあるハルヒの制服も、カーディガンが足りないわよ！　キャラでダントツ人気なのは長門でしょう！？　そこまで揃えないなんて信じられない」
　多少喋りすぎている気もするが、でも正直、私はまだまだ突っ込める。
　ただ、その矛先をフィギュアに向けるのはやめておいた。あのショーケース（にしよう）は完璧なのだ。私も知らない衣装を着た限定版のセイバーさんが微笑んでいる。欲しい。思わず口に出しかけた言葉を飲み込み、私は、彼を見据えた。
「何よ、反論しないの？　情けないわねぇ……その程度のコスプレになんか、付き合ってられないわ」
　私も自分で何キャラなのか分からなくなってきたが、本心を吐き捨てると……彼は不意に、持っていた衣装をパイプハンガーに戻し、
「……お前の言うとおりだな」
　ぽつりと呟く。そして、
「お前みたいな女、初めてだ」
　そりゃそうだろう……どこにだっているタイプじゃないと思うよ？
　まるでどこぞのフラグを立てた乙女ゲー攻略対称キャラ（♂）が、初めて主人公の前で自分の思いを吐露しましたー……みたいなシチュエーションで聞けそうな言葉に、内心ベタだなと思う。
　勿論ときめくわけがなかった。だって、私はあまり乙女ゲーやらないし……それに……。
　そろそろ潮時かと思って立ち上がる。フィギュアに関しては敗北せざるを得ないが、この程度で口ごもるなんて、相手にならない。
　ただ、立ち上がろうとした私を阻止するように、彼は急にベッドのほうへ近づいてきて、
「ちょっ……！？」
　逃げようと思っても、体が機敏に反応出来なかった。私はそのま

ま組み伏せられ、表情の見えない彼を睨みつけるしか、ない。
「言っとくけど……こういうのは現実じゃ許されないのよ！　あんた、自分が何をしようとしてるのか、分かってやってるのよね！？」
なじるように叫んだ言葉に、彼は一度だけ頷くと、
「お前も……俺と同じなんだろう？」
「何ですって？」
「自分の好きなことを誰にも分かってもらえない、誰にもいえないまま……隠して生きるしかないんだろう？　違うか？」
彼の言葉に、言い返せなくなる。
間違いじゃないのだ。私が好きなのは、あまり人前で堂々と話せるようなことじゃない。むしろ、普通の友人関係を築くためには……絶対言えない、そんな領域。
「アンタに何が分かるっていうのよ」
「俺は、お前を受け入れられる。俺はお前を、都を――」
「名前で呼ばないで！！」
自分でも驚くくらい、大きな声を出していた。
だけど……こんな奴に、名前で呼ばれたくない。私をそう呼べるのは一人だけだって……一人しかいないんだって、そう、思ってるから。
「出会って数十分のあんたに、私の何が分かるっていうの？　こうやって強引に連れ込むことしかできないくせに！」
「……でも、お前は逃げなかっただろう？」
それはまぁ、確かにその通りなのだが。
……まさかうっかりフィギュアに見とれていました、交渉しようと思ってましたー……などという事実を告げるわけにもいかず、唇をかみ締める。
彼はそのまま、私の耳元へ口を近づけ、一言呟く。
「バッドエンドだ」

その言葉が、今の私の現実だった。

「白は素人です！」ＢＹ都（後書き）

サイトに掲載したときは、都の思考に共感してくださる方が多くてウハウハしていました。
ただ……皆様、万が一、都みたいな状況に陥ったら、全力で逃げてくださいね！

プライベート・ヒロイン

「どうして俺があんな格好を……」
彼の部屋へ向かう途中、部屋についてから、薫はずっと不満そうな顔で、先ほどの事件（？）に関することを呟いている。
「しかもル〇マリア……俺はス〇ラの方が好きだったんだ。っていうか最初から主人公に感情移入できなかったんだぞ？　それなのに……」
この部屋に戻ってきてから15分ほど経過しただろうか？　彼はベッドに座って背中を丸めたまま、ぶつぶつと呟いている。
「……キラがよかった……」
どうやらそれが、彼の本音らしい。
私は彼の隣に座って、肩をぽんぽんと叩きながら、
「まぁ、人生色々あるよ」
「……その一言で片付けられるほど、心の傷は浅くないんだ……」
本気でずどーんと落ち込んでいる彼に、私はかける言葉が見つからない。
だから、
「じゃあ……私が癒してあげようか？」
一度呼吸を整え、呟く。
「都？」
驚いたような表情で、彼が私のほうを向いた。私は無言で自分でブラウスのボタンに手をかけながら、上から、ゆっくり外していく。
すぐに上半身がはたける格好になった。薫はそんな私をしばらく見つめていたが……不意にくるりと背を向け、沈黙する。
気が付いてくれたらしい、私の変化に。
「今日の都……反則だぞ。スカートだし、コスプレだし、それに……」
私に背を向けたまま、彼がぽつりと呟いた。

実はさっき、あの衣装から着替えるときに……意を決して、下着も替えておいたのだ。
コレはなんと、真雪さんからの助言。薫の深く傷ついた心を察知した彼女からの、ささやかなプレゼント。
「気にってもらえなかった？」
無言で首を横に振る彼。
「じゃあ、私の方を見てほしいんだけど……」
これにも無言で首を横に振る彼。
「じゃあ……私、帰る……」
「都！？」
急に焦って振り向いた彼の頬に、私は人差し指をぐりっとねじ込み、
「……逃げないでよ。私は、薫に見てもらいたいの」
不機嫌な顔で見上げると、ぽつりと「ゴメン」と呟く声が聞こえた。
ったく、この人は……どうしてこう、妙なときに我慢強いというか、なんというか。
肝心なときに、私に対して一気に踏み込もうとしないんだろう。こっちは準備万端なのに。
「言っとくけど、私は最初からそのつもりなの。ココ最近は私の都合とか、バタバタしてたりとかで……その……全然できてなかったなぁって思ってっ！」
どうして女の子にココまで言わせるかな、っていうか言っちゃうのかな、私。
「それに……今日のことで、薫に心配かけちゃったし……怖かったし……だから……」
彼の胸に額をぶつけ、
「……忘れさせて、ほしい」
思い出すだけで怖くなる。足がすくんで、耳を塞ぎたくなる。
あんな思いは二度と味わいたくないし……早く忘れたい。私が知

っているのは彼だけでいい。
かすかに肩を震わせる私を、薫は少し強く、包み込むように抱きしめて、
「……1回じゃ終わらないと思うぞ？」
頷く。
「……3日間くらい拘束するかもしれないぞ？」
「3日って……」
どうやら、奈々の情報は正しかったらしい。思わず嘆息する私に、
「俺だって……」と、私の耳元で彼が反論する。
「俺だってずっと……いや、そんなに長い期間じゃないけど……でも、都がいいって言ってくれるまでは、絶対強引に抱いたりしないようにって……我慢してたんだぞ」
「知ってるよ」
そんなの、見れば分かるし。
「でも……それでもいい、から……お願い」
私は君に、おやすみって言って……それで、明日の朝はおはようって言いたい。
君も私におやすみって返して、明日の朝は笑顔で起こしてもらいたい。
そんな日々を、繰り返していきたい。
お互いに好きなことを認め合いながら、一緒にいたい。
夢みたいに幸せな時間を、ずっと。
不意に、腕の拘束が緩んだ。薫は眼鏡をはずし、着ていたシャツを脱ぎながら、
「都、一つ聞きたいんだけど……それ、誰が選んだの？」
「千佳さんに決まってるじゃない。私がこんなの選ぶような性格だと思う？」
キャミソールのストラップを引っ張りながら返答すると、「まぁ、それはそうだと思ったけど」と、微妙な格好のままの私をまじまじと見つめ、

「……高かった？」
「どうして？」
「後学のために」
どういうことだろう。彼の質問に疑問を抱きながらも、私が「トータル３８００円だったけど」と返す。
「そんなもんか」
ふむ、と頷く薫に、私は首を傾げるしかない。
「……どうしたの？」
「いや、もっと高そうに見えたから、あまりに高額だったら都に悪いかな、って」
「そこまで考えなくていいよ……」
自発的にやってることですから。
嘆息する私の眼鏡を外しながら、彼がふと、大きな手で私の前髪をかきあげて、
「……成長したって聞いてるんですけど」
「前髪が？」
「さすがに都の前髪事情まで俺は知らないけど……」
もう片方の手で、「下」を指差す。
それがどの部分を指しているのか察した私は……千佳さんがそこまで伝えていたことに、怒りを通り越して呆れてしまった。
「千佳さんって人は……」
「俺のおかげ？」
「薫との因果関係まで私は知らないわよ。私だって、自分でなりたくてなったわけじゃないし……」
世の女性の４割がカチンとくるであろう言葉かもしれないが、私の特性を考えて納得していただきたい。
「私は巨乳を愛でるのが好きなの！」
「いや、そんなこと俺の前で言われても……」
「薫だってそうでしょう！？　筋肉の引き締まった体で、白のスーツが似合って、目が鋭くて、いかにも「俺は鬼畜攻めです」って人

を見るのは好きだけど、自分がそうなりたいとは思わないでしょう！？」
「いや、それは確かにそうだけど……」
私の実に説得力のある言葉に頷いた彼だが、次の瞬間、少しだけ目を細めて、私を真っ直ぐ見据える。
「……都が相変わらずだってことは分かったけど……でも、俺からの忠告というよりワガママ、聞いてくれる？」
「はい？」
何だろう。
改まった薫に私も背筋を伸ばす。よく分からない雰囲気で向かい合っている私達は、今からお見合いでも始めるみたいに固まっていて。
彼は一瞬躊躇ったが、私の額に添えていた手を肩までおろして、
「都は……俺以外の男にとっても、十分魅力的だから。俺としては、たまに無防備すぎる都が、危なっかしくて見てられないんだ」
……本人には全然自覚がないんですけど。
「だから俺は、都と一緒に住みたいと思ってるんだよ。都を魅力的だと思うのは、この先俺だけじゃなくなるかもしれないし……」
「いや、それはないと思うけど」
思わず否定すると、薫は笑顔で首を横に振った。
「まぁ、それならそれで俺はいいよ。俺は都しか見てないから。だから……」
肩にある彼の手が、そのまま、私の体をベッドに沈める。
自分はベッドに座ったまま、その綺麗な顔で私を見下ろし、
「とりあえず都、ゴミはちゃんと分別して捨ててる？」
「……捨ててます」
奈々が。
「洋服はハンガーにかけて、クローゼットに片付けてる？」
「……片付けてます」
奈々が。

……こう考えると、相変わらずダメ人間街道まっしぐらの私。
でも……どうして私、押し倒されたまま尋問されているんだろう。
言葉だけの答えに満足そうな表情になる薫が、私の左手を顔の横まで持ってきて、彼自身の指を絡める。
そのまま一度、強く、握り締めた。
「じゃあ、俺に御褒美をくれる？」
表情に、意地悪な笑み。
「綾美の新作でいい？」
負けじと返す私。そんな私に、彼は「いいや、それはそれとして」と、やっぱり否定も肯定もしないまま、首を軽く横に振って、
「だから今日は、都が欲しい。これからも、俺以外の男は見ないでほしい」
至近距離&真顔でそんなことを言われるから、耐性のない私は赤面して口ごもってしまう。
「ダメ？」
あぁもう誰か何とかしてよこの人。無自覚で乙女の心臓に負担かけすぎなのよ！
でも、
「……言って」
ぽつりと、私は呟いていた。
薫の言葉を喜びながらも、物足りないと思ってしまう。それがきっと、欲張りな私の本音。
だから、私は正直に呟く。
彼との距離を、自分からもっと近づけるために。
「見ないでほしい、じゃなくて……俺しか見るなって、言って……」

きっと、この先何があっても……彼は、私を守ってくれる。
そして、私は彼の側から離れない。離れたくない。
愛しいとか、大好きだとか……そんな思いよりももっと強く、一緒にいたいと思う。明日も、名前を呼んで笑顔を向けてもらいたい

と願う。
――君のいない日常なんか、私には考えられないから。
一回り大きな体を何度も抱きしめながら、そんなことばかり、考えていた。

プライベート・ヒロイン（後書き）

エピローグへ続きます……うん、この内容は１５禁だな。

大切な場所をね、見つけたんだよ。（前書き）

エピローグは千佳さん視点でございます。彼女――彼の決めた結末を見守ってください！！

大切な場所をね、見つけたんだよ。

新谷君にとっての都ちゃんが、あたしにとっての真雪だと思っていた。

それはある意味大正解だったけど――でも、あたしと彼には、明らかな違いがある。

「……何事もなくてよかったよ、本当に」

あたしと新谷君であの部屋の男に正義の鉄槌を加え、二度とこんなことするなよと誓約書を書かせた後。（書かせるよう言ったのは真雪である）

二人と別れた私達も、自分達の家へ向かって歩いていた。

西日を背にして、国道沿いを歩く。横断歩道で信号待ちをしているときにぽつりと呟いた言葉には、真雪も同感だったようで、

「新谷君も、色々大変そうね」

「だねー……都ちゃん、これからも色々無茶なことやらかしそうだし」

本人たちがいないので、言いたい放題。ただ、あの二人は今後もあのペースで付き合いを続けていくのだろう、あの二人にしか分からない空気で、ずっと。

信号が変わったので、歩みを再開する。ギリギリまで歩行者に近づく車を軽く睨みながら、車の往来が激しい道路を渡りきって。

「……ねぇ、千佳。一つ聞いてもいい？」

「ん？」

あたし達が一緒に暮らしているマンションの入り口前。さっさと中に入ろうとしたあたしだが、不意に足を止めた真雪につられて立ち止まる。

振り返った彼女は、今までに見たことがないほど……儚い存在であるように思えた。

手を伸ばせば消えてしまうんじゃないか、そんな錯覚。
微妙な距離のまま、彼女があたしに問いかける。
「もしも私が……今日の都さんみたいになったら、助けに来てくれる？」
「当たり前でしょ？　あたしはそんなに薄情じゃないよ」
当然の質問に笑って返答するあたしだが、
「真雪？」
「……本当に？」
「ちょっと、どうして疑うのよ。あたしが真雪を見捨てるような、そんな人間だと思ってるわけ？」
彼女に信用されてないような気がして、少し声を荒らげる。
「あたしは真雪を見捨てたりしない。何があっても絶対助けに行くわよ！」
彼女の存在がなければ、今のあたしはいない。
真雪と出会っていなければ……あたしは、「あたし」でいられなかったのだから。
思わず激昂したあたしに、彼女は「ごめんなさい」と目を伏せて呟く。
「……バカなこと聞いたわね。さて、今日の夕食は千佳の担当だから……私は部屋でのんびりさせてもらおうかしら」
「真雪……」
あたしの横をすり抜けて、マンションのエントランスに入っていく真雪。
そんな彼女の背中を見つめながら、釈然としない思いだけが、あたしの中で、くすぶり続けていた。

それからも、彼女は特に変わりなかった。
私達の部屋は２ＬＤＫで、６畳づつの個室と、そこに続く１２畳のリビングで食事をしたりテレビを見たりしている。後は玄関横にあるキッチンと、風呂場とトイレを供用中。まぁ、至極一般的なル

ームシェアの形ではないかと思う。
夕食後、あたしはぼんやりテレビを見ながら……さっきの真雪のことばかり、考えていて。
あたしに何を伝えたかったんだろう。付き合いがそこまで長いわけでもないけど、最近は彼女の表情から……真雪が何を考えているのか、何となく察することが出来るようになってきていたのに。
……出来るようになったって、思ってたんだけどなぁ。
「千佳、お風呂いいわよ？」
パジャマを着て、濡れた髪をタオルで拭きながら……だらりと床に転がっているあたしを呆れ顔で見下ろす真雪。
「……洋服、しわになっても知らないから」
「アイロンは自分でやりますよ」
「前みたく、ブラウスを焦がさないようにね」
過去の失敗をにやりと笑う彼女に、あたしは起き上がって頬を膨らませ、
「同じ失敗を二度と繰り返さないのが藤原千佳なんだよっ！」
「ハイハイ。その言葉、忘れるんじゃないわよ？」
しょうがないとでも言わんばかりの表情で彼女はあたしに背を向け、自分の部屋へ向かう。
「――真雪！」
「ん？」
思わず呼び止めてしまった。反射的に振り返る彼女だが……勢いだけで呼び止めたあたしは、どうしていいのか分からないまま、言葉を捜す。
彼女に伝えようと思っていた言葉が、確か、どこかにあったはずで――
「あたしは……真雪がどこにいたって助けに行く」
「千佳……」
「約束する！　あたしは――真雪と、一緒にいたいって思ってるから……」

後から考えれば、真雪にとってはた迷惑な言葉だったと思う。
これから、あたしはどうなるか分からない。もしかしたら症状が改善するかもしれないし、悪化するかもしれない。不安定なあたしと一緒にいることは、あたしと何の関係もない真雪にしてみれば、明らかな負担であり……迷惑なことだって、分かっているつもりだけど。
今まで誰も手を差し伸べてくれなかった。みんなが「あたし」を完全否定したこの世界で……真雪は、真雪だけは、その笑顔であたしに手を差し伸べてくれた。
これが、どれだけ救いだったか。
どれだけ――彼女を愛しいと思ったか。
「真雪にしてみれば、迷惑な話だって分かってる。けど……あたしは、あたし、はっ……！」
あたしは、
「真雪以外なんか……いらない！　あたしは、真雪がいてくれればそれでいい！！」
聞き分けのない子どもみたいに、あたしは肩を震わせて感情を吐き出していた。
ようやく、気が付く。
あたしと新谷君の違いは、相手のことをどれだけ大切に思っているかを自覚しているのかってことだ。新谷君は都ちゃんのことを誰よりも大切に思っている。他の人間とは比較できないくらいに彼が彼女を愛していることは、明白だった。
じゃあ、あたしは？　あたしは真雪のことが大切だ。でも、それだけ？　仮に明日、彼女があたしの前からいなくなってしまったら……あたしは、どうする？
泣くだろうか？　恨むだろうか？
……ううん、その程度じゃすまない。きっと、自分を見失うと思う。
そこまで彼女に依存しながら、あたしは、彼女の優しさの上でし

か生きてない。自分の足で立つことを恐れ、世界を怖がり、外を見つめようとしない。
——新谷君は、きっと違う。都ちゃんを守るために、自分の足で立つことを望むだろう。そして、彼女を支えようとするはずだ。

じゃあ、あたしは？

「千佳……？」
普段とは明らかに違うあたしの態度に、心配そうな顔で座り込む真雪。
至近距離で見つめる彼女が、とても、綺麗に見えて。
ほのかなシャンプーと石鹸の香り。濡れた髪の毛が首筋にまとわり付いて、雫がポタポタと床におちていく。
「どうしたの？　どこか悪い？」
化粧なんかしなくても、十分魅力的な容姿。その名前にふさわしく、雪のように透き通った肌と……真っ直ぐにあたしを見つめる、黒い瞳。
「ねぇ千佳？　千佳ってば！！」
「……ふふっ……あはははっ……！」
思わず、あたしは笑い声を上げていた。
状況を理解できない真雪が目を白黒させているけど……でも、ようやく、あたしは認めるしかない。
あぁ、あたしの負けだよ新谷君。君に触発されるなんて、あたしもまだまだ若いな。
認めるよ、あたしは、
「……長かったな、ここまで」
「千佳？」
「ようやく……「俺」でよかったって、思えるかもしれないよ、真雪」
やっぱり目を白黒させている彼女に、心からの笑みを向けて。

「さて、お風呂に入ってスキンケアしなくっちゃー★　あ、真雪、あんたの使ってるボディーソープ貸してねー」
「えぇ！？　ダメよ千佳！　あんたが使うと減りが早いんだから！！」
ケチなことを言う彼女を背に、自分の部屋へ寝巻き一式を取りに行くあたし。
……その後、お風呂場に向かった真雪がボディーソープを隠していることに気が付き、軽く口論になるのだが……それはまぁ、別の話で。

あたしは、真雪のことが好きなんだ。
出会ったあの時から、彼女の手を握り締めた瞬間から、ずっと。

「……びっくりしました」
次の日の夕方、やっぱりバイトの休憩時間が少し重なった新谷君とロッカールームで鉢合わせ。今度は彼が仕事に向かう準備をして、あたしがこれから栄養補給なのだが……あたしの変化に気が付いた（まぁ、気がついて当然だけど）彼が、心底驚いたという顔であたしを見つめる。
「髪の毛、切ったんですね」
「そ。ショートヘアーもなかなか似合うでしょ？　都ちゃんに見える？」
午前中にばっさり切って、今はすっきりしたショートヘアー。どうやらお客さんは男女の区別がつかないらしく……フロア内をうろうろするあたしをジロジロ見ながら、ヒソヒソと憶測を飛び交わせている光景を、この４時間で何回目撃しただろう。
実質、都ちゃんよりも短くなってしまったのだが……わざとらしく流し目を向けるあたしを、彼は爽やかに斬り捨てるのである。
「見えませんから」
「うわひどっ！　相変わらず、都ちゃんに関しては厳しいなぁ……」

スポーツドリンクを飲みながら嘆息するあたしは、ロッカーに寄りかかって……ブラウスを整える彼を、見つめた。
「昨日は、あの後どうなった……なんて、聞く必要もないか」
「今回ばかりは、藤原さんに感謝しますよ。これで都も少しは女らしくなってくれるんじゃないかと思います」
相変わらずぶっちゃけてくれる彼は、眩しいくらい強い。
どうやら、昨日はよっぽど楽しかったと見た。多分今日もバイトが終わったら、都ちゃんが待っているんだろう。都ちゃんも大変だねぇ……今度じっくり話を聞かせてもらわないと。
「都ちゃん、これからもっといい女になるんじゃないの？　悩みは尽きないねぇ、新谷氏？」
「大丈夫ですよ」
あたしの言葉を、彼は余裕の笑みで否定して、
「都は、俺しか見てませんから」

いつかあたしも、彼のようになれるだろうか。
好きな人に対して、誰よりも強く。
今日も相変わらず爽やかにフロアへ出て行く彼を見送りながら、自然と、表情が笑顔になる。
見ていてイライラしないこの二人は、実に貴重なバカップルであるような気がした。

さて、ココからは少し余談。
「おかえりなさい、千佳」
その日、夜８時過ぎ、バイトから帰ってきたあたしをいつもの笑顔で迎える真雪。
「疲れたー……」
ぐたりとダイニングテーブルに座り込むあたしに、そっとお茶を差し出して、
「その髪型の反応は、どうだった？」

「すっかり性別不詳になっちゃったよ。まぁ、面白いから放っておくけど」
お茶を一口すすってから、
「今日の夕食は、ハンバーグ？」
台所に立つ彼女の背中に尋ねると、「ご飯とお味噌汁、お願いね」と、笑顔で役割分担。
彼女の指示に従いながら隣に立ち、鍋に入った味噌汁をお椀にそそいでいると、
「……ねぇ、千佳」
「はいはい？」
「私も、千佳と一緒にいたいって、思ってるわよ」
突然の言葉に、あたしは持っていたおたまを鍋の中に落としてしまう。
思わず彼女をまじまじと見つめてしまった。フライパンからいい色に焼きあがったハンバーグを皿の上に盛り付けながら、真雪がちらりとあたしを見やり、
「……今日は、一緒に寝てみる？」
「ばっ……！」
「冗談よ。さっさと食べましょ、今日は見たいドラマもあるし」
あたしを軽くあしらいながらテーブルをセッティングする真雪。
あたしは味噌汁を持ったまま、そんな彼女を見つめて、
「――寝かせてやらねぇよ」
本音はまだ、一人で呟くだけにしておく。
「？」
「なーんでもっ！　さーて、ご飯ご飯ー。真雪、マヨネーズ取って」
「ケチャップ以外は認めないわ。今日は諦めなさい」

あたし達の日々は、まだもう少しだけ、このままだと思うけど。
でも……これからゆっくりでも変化していけばいい。あたしが変えていければいいかな、なんて……そんなことを考えて。

こんなあたし達の関係は、これからも実に奇妙なまま、それでいてあたしたちらしく、続いていくのだ。

大切な場所をね、見つけたんだよ。（後書き）

とりあえず一区切り……皆様、いかがお過ごしでしょうか？　霧原です。

今回は正当なる続編「Ｔｗｏ　Ｓｔｒａｎｇｅ　Ｉｔｅｒｅｓｔ　Ｓ／Ｓｅｃｏｎｄ　Ｐｒｏｇｒｅｓｓ　－Ｌｏｖｅｙ　Ｄｏｖｅｙ－（以下ラビダビ編）」をここまで読んでいただき、本当にありがとうございます！！

今回は新キャラの千佳と真雪、二人の奇妙な関係が何となく軸になったので、殊更綾美と大樹の出番が少なくなってしまいましたが。（外伝でフォローしたいです……）

サブタイトルの「ラビダビ」という言葉にあるように、とにかくラブでしたねぇ（書いていて楽しかったですけど）……マニアックな要素よりも普通にラブストーリーになってしまいました。後半都や薫がやたら語っていたのは、霧原の自棄だと思ってください。（苦笑）

都と薫の二人は、物語が進むたびに親密にしかならなくて……もうどうしよう、このバカップルめ勝手にラブラブしてろ！！　と、作者としてあるまじきことを何度思ったことか……。

う、うざいと思われたら嫌だなー……と、思っているんですけど。楽しんでいただけたのならば幸いです。

あと、ここまで完結が長引いてしまったのは……霧原が最後のアップを忘れていたからですごめんなさい！！

第３部も、そのうち……公開出来ればいいなぁ。（サイトにはありますが）

今後とも、このヲタカップルを生暖かく見守っていただければと思います。ありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1416u/

Two Strange InterestS 2nd -Lovey Dovey-

2011年7月29日03時28分発行